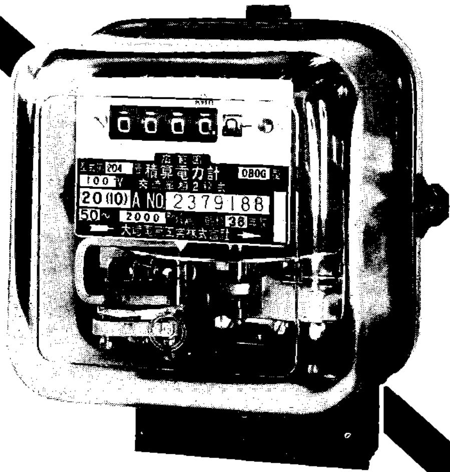
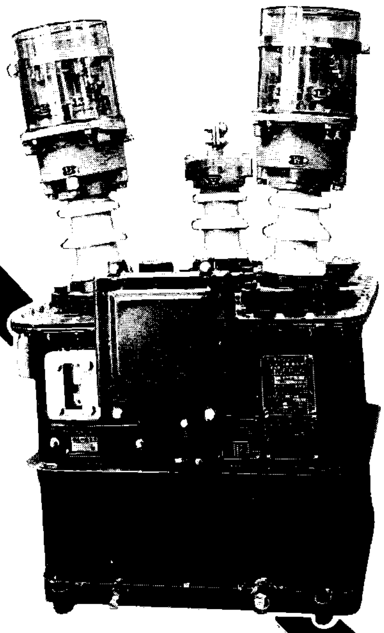
Osaki

最高の確度と信頼度を持つ

積算電力計



OBOG型広範囲単相積算電力計



計器用変成器

6600Ｖ用重予型PCT

主要製品

積算電力計・電流制限器
計器用変成器・電圧調整器
配電盤・分電盤・制御盤

大崎電氣工業株式會社

本社・五反田工場	東京都品川区五反田１の２６３	電話東京(443) 7171代表
蒲田工場	東京都大田区原町10	電話東京(732) 6511代表
埼玉工場	埼玉県入間郡三芳村大字藤久保	電話所沢 (22) 1205代表

ハンドボール「第17号目次」

表紙写真——世界選手権大会第一戦でノルウェーを破った勝利の瞬間、喜びの握手を交わす日本選手団（39年3月6日）

私の言葉

強い団結の勝利

渡辺和美

（世界選手権日本チーム団長）

私は初めて日本選手団の団長に選ばれ、世界選手権で1勝をあげる幸運に恵まれた。この1勝は日本ハンドボール界が世界選手権で初めてのものであり、記録に残る貴重な勝利である。この大成功のかげには高嶋監督はじめ選手団の強い団結、強い結束のたまものだと信じている。過去三回の欧州遠征で見られなかった強い団結、これはこんごの海外遠征にも絶対必要なことである。海外遠征となるとかく物見遊山の気持ちになりがちだが、今回はその素振りすらなかったのはりっぱであった。私の会社に勤務する社員十人が参加し、社長である私が団長だったためもあるが、選手諸君はほんとうにベストを尽してくれた。それに高嶋監督の統率もすばらしかった。欧州のハンドボールをよく知り、その技術をすぐ自分のものにするところはさすが。すべてがうまく行ったわけだ。次の世界選手権で日本が再び勝てるかどうかは疑問だが、少なくとも今回の遠征の気持ちを忘れないことを祈っている。

団長としての仕事も多かった。それがその場で決断を強いられるケースが多かったので、いささかいそがしかった。団長の仕事といえばそれまでだが、これからも現地での交渉ごとが多いので団長もしっかりしないといけない。特に今回はチェコでの滞在費問題、ステラ来日の件、尾形君の入院騒ぎなど問題が次ぎ次ぎとあった。日本にいる日本協会の首脳部にはこれがどこまでわかっているか。幸い高嶋監督が極めて有能であったため、処理はすべてスムーズに運んだ。これからも有能な役員を選手団に送り込んで欧州各国のトップレベルの人たちと接触させることが望ましい。そのためには日本協会首脳部がもっと努力しなければむずかしい。だれが行ってもまごつかぬよう心がけてもらいたい。

ヨーロッパの審判は実にうまい。これから日本チームが海外遠征するときは、できるだけ日本から審判が同行してヨーロッパの審判技術を見聞してきてほしい。ヨーロッパと日本との審判技術にはかなりの格差がある。これは現状ではやむを得ないことだ。少しでもヨーロッパの水準に近づいて行く方向に持って行くべきだと思う。試合に興味があるかないかは、審判の笛ひとつにかかっているといっても過言ではない。

ヨーロッパと日本との選手を比べるとかなりの差がある。つまり日本の選手は小さいのである。日本が世界選手権で優勝するためには、まずからだづくりをやらねばならぬ。大柄のヨーロッパ選手と太刀打ちできるからだが必要なのである。これがわれわれに残された大きな課題といっていい。

待望の1勝

日本、ノルウェー（前回7位）を破る

第5回7人制男子世界選手権大会



第5回7人制男子世界選手権大会は3月6日からチェコスロバキアのプラハ、パルドビッチ、ゴットワルドフ、ブラチスラバの四都市で開かれた。参加国は日本、ルーマニア、地元チェコはじめ16カ国、4チームずつの4ブロックに分けて第1次リーグ戦を行なった。D組（パルドビッチ）から出場した日本は6日の第1戦で前回7位のノルウェーを圧倒し、18―14と4点差で打ち破り、世界選手権で初めて勝利を飾った。昭和12年に日本陸上競技連盟から独立し、ハンドボール協会が誕生していらい、初の勝利である。7日の第2戦の対ソ連戦はエース竹野の負傷退場が響いて10―40で敗れ、9日の対ルーマニア戦は健闘むなしく12―36で惜しくも準決勝リーグ進出のチャンスを逸した。9日パルドビッチ会場のレセプションで日本チームは最も礼儀正しく、規律のあるチームとしてパルドビッチ大会組織委員会から表彰され、また竹野奉昭選手（大崎電気）はパルドビッチ大会の最多得点選手（17点）として同じく表彰された。なお、ルーマニアが決勝でスウェーデンを破り、堂々と2連勝した。なお日本チーム渡辺団長ら一行十六人は3月25日、片瀬マネジャー、尾形選手の二人は4月6日羽田着で帰国した。

（カット写真はパルドビッチ体育館）

〔注〕戦評は鷲尾武治氏

ルーマニア、堂々と2連勝

日本、1勝2敗で11位

第1次リーグ

「D組」

▽3月6日

ルーマニア 16（7―8、9―6）14 ソ連

日本 18（9―4、9―10）14 ノルウェー

〔評〕タイムアップのホイッスルが鳴る。日本のベンチは全員総立ちして歓声をあげる。渡辺団長、高嶋監督が飛び上がって喜ぶ。みんなが走り寄って堅い握手。観覧席で観戦していた片瀬マネジャー、宮原宏、餅原選手も両手を上げて喜ぶ。日本が世界選手権で初めて勝利をあげたのだ。思えば長い勝利への道だった。日本にハンドボール協会が生れて27年。やがて30年を迎えようとしている。昭和36年の男子、37年の女子、38年の学生と過去三回にわたって世界選手権に出場したが、いずれも全敗に終わった。「世界のヒノキ舞台で1勝を……」の夢が実現したのだ。忘れることのできない昭和39年3月6日。ノルウェーは前回7位のチームである。日本はこのノルウェーを破ったのだから文句なしにほめていい。ルーマニアのクンスト監督は日本の勝利をとび上がって喜び、試合終了と同時に控え室に駆け込んできて渡辺団長、高嶋監督と堅い握手。約七千人のファンも「ヤパン、ヤパン」と声援してくれた。

日本は最後まで7人の選手で押し通した。竹野、東、宮原藤、田口、北村、住広、福本。いちどもメンバーチェンジしなかった。60分間走りまくった闘志、これがノルウェーを破ったのである。ノルウェーはしきりに選手を交代させて反撃してきたが、日本のこの気力の前には勝てなかった。日本のスローオフで開始。ノルウェーは一線防御を敷いて日本の出方を見た。前半2分ノルウェーはキールが真っ正面からシュート。GK福本はこれをよく止めたが、ボールは福本の足もとに落ちて不運にもゴールイン。これは福本のミスではなく、ボールにスピードがあったからだ。先取点をあげたノルウェーはローリングパスで日本のデ

反	得	S	（日本）	（ノルウェー）	S	得	反
10	9	21	竹野	ピーター	0	0	0
12	1	3	東	アルヌレフ	4	0	5
6	0	1	宮原藤	キール	6	2	4
2	0	0	田口	エジル	3	2	2
7	5	10	北村	トライグベ	9	4	4
8	3	16	住広	カールジョーグ	5	1	4
				アリドル	7	1	1
				クヌト	5	2	2
				エリク	5	0	3
				ペル	11	2	7
0	0	0	福本 GK	ロルフ	0	0	0
451851			（2）7MT（5）		551432		

▽退場 宮原藤、アルヌレフ

遠征総成績

〔世界選手権〕

	月日	場所		成績	
1.	3. 6	パルドビッチ	○	日本 18(9―4 9―10)14	ノルウェー
2.	7	〃	●	日本 10(6―23 4―17)40	ソ連
3.	9	〃	●	日本 12(7―16 5―20)36	ルーマニア

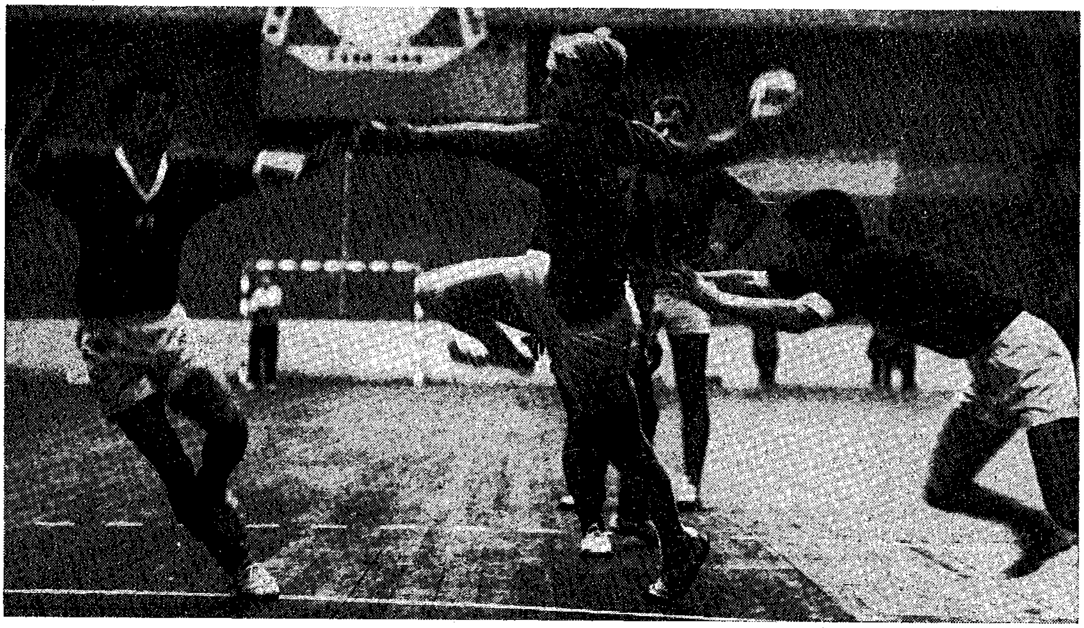
〔親善試合〕

	月日	場所		成績	
4.	2.21	ナント	●	日本 17(7―6 10―12)18	ナント選抜
5.	26	モンベリアー	○	日本 26(14―11 12―12)23	ソショー選抜
6.	28	ビルフランシュ	○	日本 25(12―10 13―10)20	リヨン選抜
7.	3. 1	エブリュー	●	日本 14(6―14 8―13)27	フランスナショナル
8.	12	プラハ	○	日本 14(5―5 9―8)13	プラハ選抜
9.	〃	〃	○	日本 23(10―4 13―6)10	プラハ学生
10.	15	ロボシチェ	○	日本 27(11―12 16―7)19	ロボシチェ選抜
11.	17	サンモール	●	日本 23(12―14 11―11)25	ステラ
12.	18	ディジョン	○	日本 22(10―3 12―14)17	ディジョン選抜
13.	21	テラビブ	○	日本 20(12―9 8―7)16	イスラエルナショナル

〔練習試合〕

	月日	場所		成績	
14.	3. 3	ストコフ	○	日本 45(23―3 22―2)5	ストコフ炭礦
15.	4	プラハ	●	日本 7(6―19 1―21)40	チェコナショナル
16.	13	プラハ	●	日本 15(5―12 10―11)23	アラブ連合ナショナル
17.	23	レホボット	●	日本 11(5―5 6―8)13	イスラエルナショナル

ィフェンスをくずしにかかった。日本は5―1のディフェンスでがっちり固め、いままで見られなかった早い動き、早い詰め、鋭いアタックでノルウェーの攻撃を早めにつぶした。しかもノルウェーのポストをいち早くつぶしてしまった。〃日本のディフェンスは甘い〃といわれていたが、スローオフ後の2分間にみせた日本のディフェンスは実にすばらしかった。4分北村がノルウェーディフェンスの腰高をうまくついてアンダーシュート。これが見事決まって1―1。日本はディフェンスばかりでなく、攻撃にもスピードがあった。両サイドをうまく使いながら北村、田口、宮原藤が激しくゴール前を走りまくって、ノルウェーディフェンスをゆさぶった。この早い動きでノルウェーはちょっと面食らった。このすきをついて6分に竹野が右サイドからワンバウンド・シュートして2―1とリードした。ノルウェーは7分にペルが7メートルスローを決めて2―2となった。ノルウェーの攻撃は単調だった。フリースロー・ライン上でのローリングパス、ジャンプパスばかりで攻撃範囲が狭かった。だから日本は5―1のディフェンスがくずれることがなかった。これが日本に大きく幸いした。日本は伸び伸びとプレーし、こんどの遠征中、最高の出来をみせた。試合終了後に竹野が「二日間休養できたのが、伸び伸びプレーできる原因となったのです」と言ったほど、日本のプレーはよかった。いちばん心配されていたディフェンスが予想以上に厚く、しかも動きが軽かった。攻撃力も幅広く、技術も変化に富み、ノルウェーをはるかに圧していた。両サイド攻撃はもちろん、早いパス、フェイント、リターンとひとつもミスがなく、持てる力をフルに出した。7人の選手の気持ちが一致して4―2と2点差。11分にはあざやかなリターンパス、田口―北村とボールが渡って北村がシュートし、12分に東がプッシングシュ

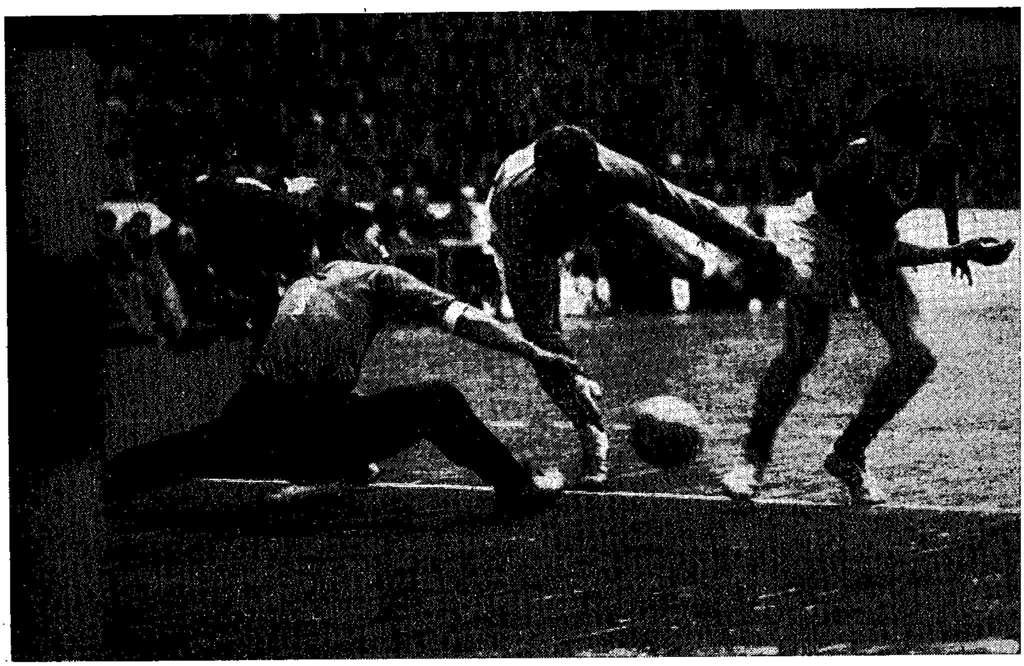


日本―ノールウェー，カールショーグのシュート，左は東，右は宮原藤

ートと矢継ぎ早やの攻撃で6―2と日本のリード。ノルウェーの攻撃力から推してこの4点差は前半の大きなヤマ場。なかば日本が試合の主導権を握った感があった。13分ノルウェーは7メートルスローで1点を返したが、日本も竹野が14分に7メートルスローをあげて7―3といぜん4点差。ノルウェーはボールをよく回してチャンスをうかがったが、住広、竹野、田口、宮原藤らの早いつぶしに合ってノルウェーはシュートチャンスがなかった。試合は完全に日本のペース。ノルウェーはキール、ペルにボールを集めて打たせたがGK福本のファインプレーで得点できなかった。17分竹野がきれいなジャンプシュートして8―3。ノルウェーは19分にペルが7メートルスローを失敗してから24分まで得点なし。24分30秒日本ゴール前のフリースローをキールがロングで決めて8―4としたが、28分竹野が1点を追加して前半9―4で終わった。前半にみせた日本の攻撃、守備は完全にノルウェーを上回っていた。それにディフェンスがこんなにやるとは思いもよらなかった。3月4日のチェコ・ナショナルチームとの練習試合のときのプレーに比べると、まさに〃月とスッポン〃の差があった。

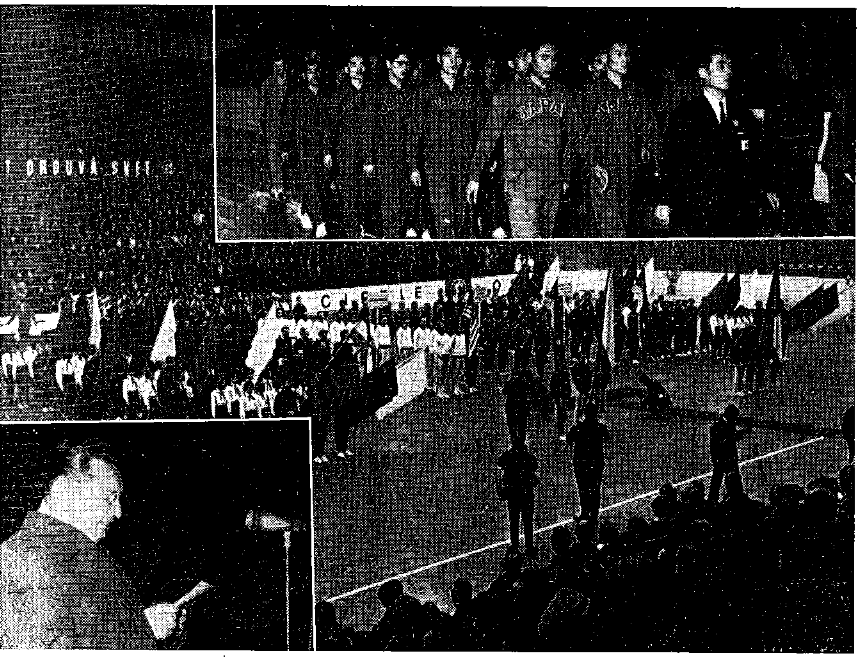
後半ノルウェーはローリングパスから少しでも空間ができると、しきりにロングシュートを打ってきた。前半の5点差を一気に縮めようと必死に反撃してきた。あきらかに〃あせり〃である。1分30秒に住広が初めてロングを決めて10―4と6点差にした。ノルウェーは4分にカールジョーグが決めて10―5。このあと日本は7分30秒に北村が得意のアンダーシュート、8分30秒に住広がジャンプシュートして12―5。ところが10分をすぎるとノルウェーはものすごい突進力をみせ、エジル、トライグベに打たせて20分には14―11と3点差に迫った。日本はスローオフからひとりも選手交代がなく、疲れが見えはじめ少し動きが鈍くなった。ここがこの試合の第二のヤマ場。ノルウェーはどんどん選手を交代させて反撃機をつかもうとした。残り時間はあと10分。攻めるノルウェー、守る日本。観衆は「ヤパン、ヤパン」と日本に声援。日本のベンチから今野主将の大きな声が飛ぶ。渡辺団長、高嶋監督の表情が硬くなる。ノルウェーは激しく攻め寄り、22分住広の手痛いペナルティーがあり、トライグベが7メートルスローを決めて14―12。その差わずか2点。ここからが勝負どころ。速攻の応酬となったが、互いにつぶし合って得点なし。(試合後に北村は「早くタイムアップになればいい」と話していた)。広い体育館は割れるような大歓声。日本選手は歯を食いしばって走り回った。25分竹野がGKのタイミングを狂わす巧みなジャンプシュートで15―12と3点差。26分にも速攻から竹野がジャンプシュートして16―12と4点差。残り時間はわずか4分。この4点差でほぼ日本の勝利が決まった。ノルウェーは必死になって反撃してきた。28分クヌトが1点を返したが、日本もすぐ北村、住広が連続ゲットして18―13と5点差。これで勝負は完全に決まった。29分30秒ノルウェーはアリドルのシュートで18―14としたが、日本ボールとなってホイッスル。

ノルウェーは日本を甘く見ていたようだ。パルドビッチ入りも日本より二日も遅れて大会前日に到着。六日の昼間の練習も会場でボールを蹴ってほとんどの選手がサッカーの練習をするなど、不まじめな行動があった。こんなことをやっていては勝てないのも当り前だ。日本は2月19日に羽田を出発し、フランスはもとより、プラハにきても親善試合、練習試合を重ね、コンディションの調整、技術の向上、試合の勘、ふん囲気になれるように努力してきた。この差がそのまま18―14のスコアとなって表われたのだ。渡辺団長は「横浜での強化合宿、フランス、チェコでの親善試合が実を結んだのだ。チェコまでやってきた甲斐があったし、これで大いに自信がついた。ノルウェーは前回7位のチーム、これに勝ったのだから実に貴重な1勝である」と喜びを語った。高嶋監督も「試合前に私の言ったことを7人がよく守ってくれたし、自分のプレーを忠実にやってくれた。しかもいままでにないすばらしい動きだった。ディフェンスがよかったのも勝因のひとつである。最も大きな勝因は気力である。スローオフからタイムアップまでひとりも選手を交代させず、この7人が力の限り戦かってくれた。世界選手権で初めての勝利、なにもいうことはない」と感激していた。



日本―ノールウェー・GK福本のファインプレー

勝利の瞬間 ××× 勝利の瞬間



ほんとうによかった

今野　邦彦

ノルウェーに勝ってほんとうによかった。ノルウェーに勝てるなんてルーマニアの選手も、ソ連の選手も、日本のハンドボールファンも思っていなかったにちがいない。18—14で残り時間あと30秒のとき、どきどきして時間の長かったこと。私はベンチで立ったり、すわったり…。やがてタイムアップのホイッスルが鳴った。私はどうしていいのかわからなかった。腰の重いことで有名な高嶋先生も日本の勝利が一歩一歩近ずいてくると、腰を上げたり下げたりしていたほどだ。ホイッスルが鳴ったとき、渡辺団長も高嶋先生も形容できないほどの喜び方だった。長い合宿、ヨーロッパでの親善試合で磨いてきた日本の技術をいかんなく発揮してくれた選手たち。彼らにたいし感謝の気持ちでいっぱいでした。私はキャップテンという重責。これをみんなの努力のおかげで果せた。ノルウェーに勝ってほんとうによかった。

ルーマニアの団長、監督、選手たちがみんな日本選手の控え室へ飛んできて勝利を祝福してくれた。これがうれしかった。日本チームはいままでにない完ぺきなプレーを渡辺団長、高嶋先生の前で見せてくれた。チェコまでやってきた甲斐があった。写真を写すひまがなかった。というよりはゲームに気を取られてしまったからだ。きょうの勝利は永遠に忘れないだろう。1964年3月6日…この日を忘れることができない。私はハンドボール界に首を突っ込んでから、こんなに感激したことはなかった。私は幸福な人間だと思わずにはいられない。

渡辺団長、高嶋先生、選手の諸君よ。ほんとうにありがとうございました。

ゴッドワルドフの開会式。上は入場する日本チーム。下はパルドビッチの開会式であいさつする組織委役員

とうとう勝った

福本　弘

とうとう勝った。前回7位のノルウェーに…。私はタイムアップのホイッスルをきくと、飛び上がりながらセンターラインまで走って行き、だれかれかまわず握手した。ベンチを見ると飛び上がらんばかりの喜びよう。長い間夢にまで見た世界選手権での勝利。合宿の成果が実を結び、チームワークの良さが勝利となって表われたのだ。団長さん、監督さん、ほんとうにありがとうございました。私のこの手で日本ハンドボール界の歴史の一ページにこの勝利を記すことができました。この試合は1人の交代もなく、闘志と気力とで勝利を握ったのだ。私はハンドボールを始めて8年、こんなに感激したのは初めてだ。

ノルウェーに追い上げられたとき、残り時間が気になって困った。わずか2分しか残っていないのに、それが1時間にも2時間にも思えた。そのうちベンチを見たらノータイムの合い図。スコアボードを見ると18—14。私は眼をこすってもういちどスコアボードを見た。18—14。このときは〃勝った〃と内心ひそかに喜んだ。タイムアップのホイッスルが、私の鼓膜に強く響いた。〃勝った。勝った〃。私は無我夢中で走り出した。ベンチを目がけて…。

さらに努力を

竹野　奉昭

記念すべき3月6日。われわれはノルウェーを破って勝利をおさめた。勝たねばならぬ！　これに向かって練習を続けてきたのだ。それが実を結んだのだ。ほんとうにうれしかった。だが喜んでばかりはいられない。この1勝を土台に私たちはさらに努力して行かねばならぬ。ヨーロッパのハンドボール界は日本以上に進んでいる。日本はさらに前進して行かねばならない。日本が取り残されないために…。私はあすからまた新しい勝利のために努力して行く。

忘れられない感激

東　嘉伸

タイムアップの笛が鳴った。日本ハンドボールマンの念願だった世界選手権での勝利！　チェコまでやってきた甲斐があった。この日のために私たちは寒い横浜で強化合宿を積んできた。この努力が報いられたのだ。この感激は一生忘れ去ることができないだろう。おそらく日本にいる関係者は私たち以上に喜んでいるにちがいない。私はひとり静かにこの感激を味わいたい。

勝利の瞬間 ××× 勝利の瞬間

世界制覇へ一歩前進

限界越えた気力の勝利

世界選手権日本監督 高嶋 洌

1964年3月6日この日は日本ハンドボール界にとって忘れられない日になった。

1961年3月の男子、1962年7月の女子、1963年1月の男子学生の世界選手権に出場したが、まだ1勝もあげられなかった。3月6日―この日に日本はついに待望の1勝をあげた。しかも前回7位のノルウェーを堂々と破ったのだ。日本チームは七千の大観衆と国際ハンドボール連盟の首脳部の見守るなかで最高のプレーを発揮して勝利をおさめた。思えば長い道程であった。協会創立いらい27年!!どうしたら本場ヨーロッパチームに、しかも本番の世界選手権で勝てるかを考え続けてきた。私にとってこの日がこんなに早くくるとは想像もしなかった。それはヨーロッパのハンドボールを知れば知るほど、その底知れない強さに舌をまいてきた私だから…。しかし渡辺団長を中心とした強固な団結と選手諸君の体力の限界を越えた気力とによ

勝利で恩返し

宮原藤支男

ノルウェーに勝った。外国のナショナルチームを世界選手権で破った。夢にまで見たこの勝利、この感激!!私にとって忘れられない試合となった。3月6日パルドビッチで…。ホイッスルが鳴ったとき、あまりのうれしさのため、どんな試合をやったのか考えるひまがなかった。団長さんと握手、監督さんと握手。そばにいるものをつかまえて次ぎから次ぎと握手した。団長さん、監督さんになんてお礼を言おうかと思ったが、なかなか言葉として出てこなかった。私はきっと興奮していたのだろう。私たちはこれでやっと日本ハンドボール界に恩返しができたのだ。ホテルのベッドにもぐり込んでひとりでこの勝利を味わおうとしたが興奮していてそれどころではなかった。未熟な私を選手団に加えていただき、しかもこの勝利を味わえたのは団長さん、監督さんのお蔭です。私は幸せです。感謝の念でいっぱいです。団長さん、監督さん、ありがとうございました。

忘れた胴上げ

田口 侑義

勝ちたくて勝ちたくて仕方なかった。それがノルウェーを破って勝ったのだ。その瞬間みんな興奮していた。団長さん、監督さんと堅い握手、そして肩をたたき合った。このときはなんにも言えず、ただ胸にジーンとくるものがあった。団長さん、監督さんを胴上げしようと思ったが、あまりの興奮のため忘れてしまった。試合中に得点すればみんなで〝バンザイ〟と大声をあげて守備につき、そして互いに〝がんばろう〟と激励し合った。この姿がいまでも眼に浮びます。勝ってほんとうによかった。これからも大いにがんばる。

目に映る勝利の感激

北村 尚英

1964年3月6日、世界選手権第1戦の勝利は私にとって忘れられない日である。タイムアップのホイッスルは午後8時40分、この勝利の瞬間は私のいちばんうれしい瞬間だった。これは日本ハンドボール界の喜びの瞬間でもあった。私は初の世界選手権、初の第1戦、初の1勝。すべてが初づくめであり、この喜びはことばで表現できない。どうやって喜んでいいのか、そのときは面食らいました。いちばん先に目にはいったのは渡辺団長の喜びの顔でした。私は団長さんにご恩返しがほんの少しできたのがうれしかった。あのホイッスルが鳴ったとき、プレーしていた同僚、ベンチにいた団長さん、監督さん、同僚、またスタンドで声援してくれた宮原宏、餅原両君、それに片瀬先生も飛び上がって喜んでくれたあの感激の光景が、いまでも私の瞼に強く焼きついています。

先輩の努力に感謝

住広 尚三

みんなが肩をたたき合って喜ぶ。握手の連続。勝利の笑顔。スタンドにいる同僚が飛び上がる。各国選手が走り寄って喜んでくれる。観衆の拍手。〝おめでとう〟の連続。しばらくしてやっと落ち着きを取り戻し、自分ひとりで心の中で勝利を喜んでいました。試合が終わった直後はほんとうのところ勝利の実感が湧かなかった。ふしぎなくらい。いまだから言えますが、試合が終わるまで勝てるとは思っていなかった。それが勝てたのだから、そのときは実感が湧かなかったのは当然だったかもしれません。この勝利――チェコスロバキアまでやってきた甲斐がありました。数多い先輩諸兄が築き上げた努力が報いられたのだ。私は先輩諸兄のこの努力に心から感謝しています。次の世界選手権目ざしてさらに精進しよう。

大きな感激

新 繁 樹

この勝利!! この感激!! 私はことばで表現できない。時間がたつにつれてこの感激は大きくなるばかり。あすの試合のことも考えず喜び合った。いちじは2点差まで追いつめられ苦しい試合だった。それだけに喜びも二倍、三倍に増えていった。ベンチでカメラを手にしたが、一枚も写真が取れないほど力がはいった。試合に見とれ、どれだけ日本のプレーが通用するか心配になってきたほどである。7人の先輩、同僚が60分いちども休まず走りまくった。そして実力を発揮してくれた。私は7人の先輩、同僚に敬意を表し、勝利の喜びを分かち合った。

実を結んだ苦しみ

井上 素行

って早くもその日が訪れた。

その日パルドビッチ（Dグループ会場）の気温は零下15度、体育館内の温度は零下5度。試合開始は夜7時30分。5時に会場に着き、ロッカールームでじゅうぶん暖をとる。その間トレーニングパンツの上からそれぞれ筋肉のマッサージ、はやる心を押えながら7時5分コートでトレーニング開始。7時30分日本のスローオフで試合が始まった。開始直後の5秒、左サイドで北村のフェイントがあざやかに決まった。シュートは惜しくもストライクであったが、このとき私は〃これはやれる〃と直感した。おそらく選手もそう感じたことだろう。

かくして何年、いや何十年かかるか知れない世界制覇への第一歩を踏み出したのである。世界制覇!!、その道は遠く、けわしい。また想像を越える努力を必要とする。しかし何年、いや何十年かかろうとも、どんなに苦しくともこれをなしとげるのがスポーツマンにあたえられた宿命である。全国のハンドボールマンよ!! みんなの力を合わせてこの大偉業に向かって前進しようではないか。

急げ長身者の養成

ノルウェーを破って11位になったとはいえ、私はこれがそのまま日本の実力であるとは信じたくない。勝利にはいつの場合でも多分に幸運が手伝うものである。いま再びノルウェーと対戦してかならず勝てるという自信はない。また最下位になったフランス、アラブ連合、米国と対戦しても同じことがいえる。勝つためには第一に力をつけなければならない。そのためにはどうすればいいか。

1　**ボールを片手で完全に握り、片手で操作する訓練を行なうこと。**これはボールテクニックを2倍以上有利にする。しかもパス、シュート、フェイントが同一動作で可能になる。手の大きさは簡単に改造できないから、握力を強くすることを考えるべきである。

2　**シュート力を強化すること。**同じ背の高さ、同じ手の大きさでも、ヨーロッパ選手のシュート力は日本人に比べてはるかに強力である。これは総合筋力の問題と考えるが、特に手首の強さは驚くべきものがある。

3　**背の高い選手を養成すること。**個人競技ならともかく、肉体と肉体とが触れ合うハンドボールでは背の高いことの方が有利であることは明白である。せめて180センチ台の選手の養成に本腰を入れる時期がきたと考える。

4　**からだつくりを真剣に考えること。**日本国内でも同じだが、特にヨーロッパでもすでに小手先でごまかす技術は通用しない時代となった。いわゆるテクニシャンは必要としない。鍛えに鍛え抜いた「鋼鉄」のような選手のみが、スポーツマンとしての栄誉と誇りとを持つことになろう。

5　**外国選手との試合経験をできるかぎり多く持つこと。**同じからだ、同じ技術でも試合経験の多い方が有利であることは明らかである。まして体力的に不利な日本は地理的な不利を克服して極力外国チームとの試合を行なうべきである。こんどの世界選手権出場チームのメンバーは少なくて30回、多くて70－80回の国際試合の経験者である。とにかくこんどの遠征は収穫がいままでになく多かった。そして日本のハンドボール史の一ページを開いたことも間違いない。こんごはこれを土台にして一歩一歩着実に前進しなければならない。しかしながらそれにはあらゆる面で多くの協力と犠牲とを必要とする。重ねて言う。全国のハンドボール愛好者よ!! 自我を捨て、一歩一歩世界制覇の偉業に向かって前進しようではないか。

1964年3月6日夜
パルドビッチで書く

横浜での二度にわたる強化合宿の苦しさ。フランス国内での移動、転戦の苦しさ。精神的、肉体的な苦しさ。この苦しみに耐え抜いた精神力。この苦しみが見事実ったのだ。すべての苦しみはノルウェーを破ったことで、一瞬のうちに大いなる喜びに変わった。ほんとうによかった。ほんとうによかった。終了のホイッスル。団長さんも監督さんも先輩も小おどりして喜び合った。満足感と歓喜とで私は理性を失いかけた。それほどこの勝利は無限の喜びであった。

この喜び、この感激

尾形　譲

大歓声の中に響き渡った勝利のホイッスル。僕はどのようにしてこの喜びを味わっていいのか一瞬わからなかった。あの勝利のホイッスルを日本にいるハンドボールの先輩諸兄に聞いてもらいたかった。みんなそう思ったに違いない。苦しい合宿の成果がパルドビッチで実を結んだのだ。この喜び、この感激は忘れることができない。

耳に残るあのホイッスル

金田　純男

勝利の瞬間、私は飛び上がった。待ちに待った勝利。私は1964年3月6日午後8時40分を忘れないだろう。試合終了を告げるあのホイッスルの音、いまでも私の耳に聞えてくる。勝利のホイッスル。〃日本は勝ったのですよ〃と話しかけるようなあのホイッスル。いまでも胸がわくわくしている。あのホイッスルをもういちど私のこの耳で聞きたい。

感　激

宮原　宏

僕は感激した。先輩が日本の勝利を握ったのだ。僕は先輩の技術、闘志、根性に頭が上がらない。団長さんも監督さんも涙を流さんばかりの喜びよう。僕はじーんと胸に迫まるものがあった。みんなになんとお礼を言っていいのかわからなかった。ルーマニアの選手がロッカールームまできて日本の勝利を祝福してくれた。うれしかった。未熟な僕を選手団に加えてくれた渡辺団長さん、高嶋先生、それに私を送り出してくれた古館常務さんはじめ会社の先輩、同僚たちに心から感謝しています。

強い団結力

餅原　正脩

先輩のあの必死になっている姿。ひとりの交代もなくがんばってくれた先輩。あのファイトには頭が下がる。僕の喜びよりも渡辺団長さん、高嶋先生、7人の先輩の喜びの方がはるかに大きかったに違いない。強い団結力－これが勝利となったのだ。あのホイッスルを聞いたとき、僕は飛び上がった。宏さん（宮原宏）も飛び上がった。僕の胸はどきどきした。急いでスタンドからロッカールームへ走って行った。

第2戦 竹野負傷、ソ連に敗る

▽7日
ルーマニア 18（11－7、7－3）10 ノルウェー
ソ連 40（17－4、23－6）10 日本

反	得	S	（日本）		（ソ　連）	S	得	反
2	2	11	竹　野		エリック	12	7	3
2	0	7	東		R・ユーリ	8	4	2
2	1	2	宮原藤		バレリー	11	9	7
2	1	2	田　口		ビタウタス	3	1	2
2	0	8	北　村		アルベルタス	5	5	4
2	3	15	住　広		T・ジマル	10	6	3
1	1	2	新		ゲオルギー	3	1	8
2	2	6	井　上		ミクナイル	10	7	3
0	0	0	金　田		Z・ユーリ	2	0	5
0	0	0	福　本	GK	A・ジマル	0	0	0
0	0	0	尾　形	GK				
15	10	53	（1）	7MT	（0）	64	40	37

▽退場なし

〔評〕日本の完敗だった。前半3－0とリードされた直後の5分に、エース竹野がソ連のものすごいボディー・チェックで左眼の上を切り退場した。試合中の負傷とはいえ、竹野の途中退場は痛かった。日本は前日ノルウェーを破って上昇気運に乗っているときだけに、このアクシデントは日本の敗因につながってしまった。ソ連は意識的に竹野を負傷させたことがタイムアップまでの間にプレーの中ではっきりわかった。〃勝つためには手段を選ばず〃のきたないプレーの連続であり、このソ連のボディー・チェックでからだの小さな日本選手はひとたまりもなかった。ソ連のこのきたないプレーに大観衆は怒り出し、笛を吹き、足でフロアーを蹴って騒いだ。大きなソ連選手が小さな日本選手を前後から押えたり、蹴っ飛ばしたりする乱暴なプレーの連続。竹野以外に負傷者が出なかっただけよかったほどだ。日本はこのラフプレーに怒り田口、宮原藤もソ連選手を押しのけたりしていたが、どうにもならなかった。世界選手権でこんなプレーを見せるのは心外だった。この試合で目についたことは、ソ連の選手はレフェリーの目をかすめて、悪質な反則行為をやっていた。ポストに立つ日本選手をうしろからすっぽりだき抱え、あるいはしっかりと腕をからませて動きを止めてしまう。一般人が大鵬、柏戸に押えられて動けないのと全く同じ。それに日本選手のプレーはおとなしすぎるし、ソ連のようなラフプレーを少しでもいいからマスターして行かないと、これからの世界選手権では勝てそうもない。

試合は竹野の退場で日本の攻撃力は半減、とくにディフェンスのコンビがくずれてソ連の攻撃を食い止められなかった。ソ連は竹野の負傷退場で元気づき、ロングばかりで攻めてきた。前半18分までに14－0とあっさり大差をつけられてしまった。住広のロングに期待をかけ、住広を前に出して5－1のディフェンスを敷いて速攻体制。19分に井上が右サイドからロング、21分新のジャンプシュートで3点を返したが、勝負はすでに決まっていた。ソ連は両サイドをうまく使い、早いパス、ジャンプパスで日本ディフェンスを浮かせて正面をうまく開けた。これには日本もキリキリ舞い。ジャンプシュート、ポストプレー、ロングシュートとソ連のペースとなってしまった。

後半のソ連は二軍選手を出して余裕たっぷり。日本も10分すぎに竹野が再び出場して健闘した。このゲームで感心したのはソ連のジャンプ力である。ジャンプによるフェイントパス、ジャンプによるロングシュートはスケールが大きく、日本選手の頭の上で楽にパスできる。ソ連の技術がこれほど進んでいるとは思わなかった。

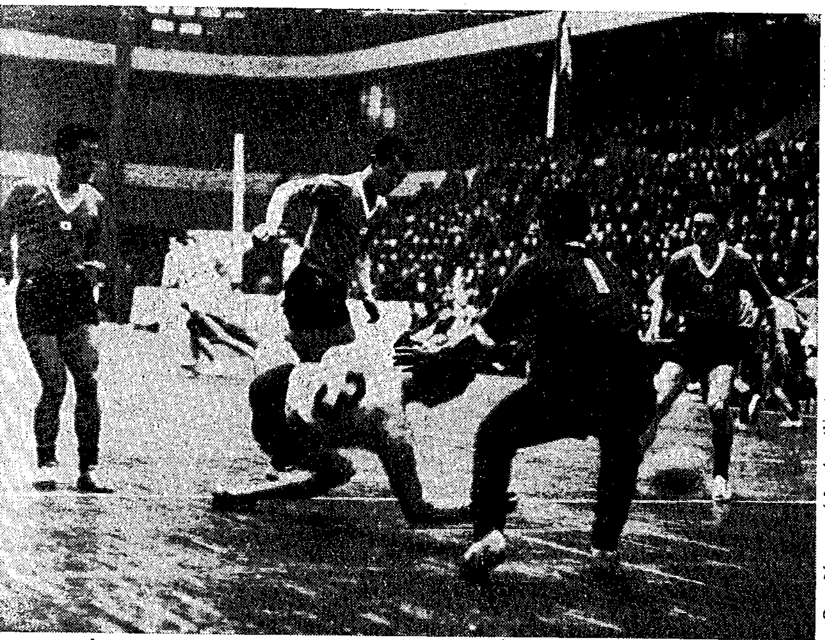


日本―ソ連、R・ユーリのジャンプシュート。右は井上

第3戦 ルーマニアに善戦むなし

▽9日
ノルウェー 13（6－7、7－4）11 ソ連
ルーマニア 36（20－5、16－7）12 日本

〔評〕ルーマニアは2連勝をねらうだけあって、攻撃力、防御力とも実にすばらしかった。攻撃面では早いパスを大きく回して日本ディフェンスを前におびき出し、ゴール正面をガラ空きにさせておいて鋭く突っ込んだ。しかもシュートがスピード豊かで、さすがのGK福本もどうすることもできなかった。左利きのグルイア、それにエースのモーゼルのジャンプシュートは見事だった。グルイアは左腕にウェートをかけ、ボールそのものに重みがある。イワネスクの強肩、手首の強さにも感心した。オテレアは7メートル要員。4本とも成功した。二段モーションでGKを前におびき寄せるタイミングのうまさ。ルーマニアに限らず



日本―ルーマニア，モーゼルの突進を竹野うまくつぶす。左は北村，右は田口

反	得	S	(日本)		(ルーマニア)	S	得	反
△1	6	27	竹野		モーゼル	9	5	1
退2	3	9	東		グルイア	12	7	1
場1	0	1	宮原藤		ナデア	4	2	0
な0	0	2	田口		コスタケII	7	3	2
し3	0	4	北村		オテレア	5	5	4
3	1	10	住広		イワネスク	14	7	2
2	1	9	新		イアコブ	8	4	2
5	1	4	井上		ポベスク	6	3	6
					ニカ	3	0	8
0	0	0	福本	GK	ボコレン	1	0	0
0	0	0	尾形	GK				
17	12	66	(1)	7MT	(4)	69	36	26

注＝ルーマニアのGKにシュート1がある。

ソ連でもノルウェーでもジャンプ力はほめていい。ボールを完全につかんでいるのでなんでもできるわけ。

防御面は5―1ディフェンス。早く動き、アタックも鋭い。日本のパスはスピードがない上に短かいため、ルーマニアに簡単にカットされた。また日本選手が突っ込んで行っても、2人ないし3人でつぶしてしまう。このつぶしの早さは大したものである。自分のからだを日本選手に密着させてつぶすのだ。からだの小さい日本選手は簡単につぶされた。おとながこどもを押しつぶすようなもの。

日本のシュートが弱いので、ルーマニアはボールをたたき落とすと得意の速攻に移る。日本選手がシュートモーションを起こすと、両サイドにいた選手はダッシュ。ルーマニアのディフェンスが日本のシュートをたたき落としたときには、両サイドからダッシュした2選手はハーフラインをはるかに越してボールを待っている。このダッシュ力は大いに学ぶべき点である。

試合は前半15分までに9―4と日本も大いに善戦した。しかしルーマニアの各選手は平均した得点力を持ち、ボールをキープすると日本は全く手が出なかった。後半のルーマニアはグルイア、オテレア、イワネスクの好シュートで点差は開くばかり。結局実力の差のとおりルーマニアが大勝した。前日のソ連のラフプレーに比べるとルーマニアのプレーは実にスマートである。それでいて基本技術を忠実に守り、各選手が自分のペースでゲームをやっている。一見してスロースターターのようだが、これはあせらずマイペースなのだ。相手の選手が倒れれば手を貸して起こしたり、相手のボールになるとボールをちゃんとフロアーの上に静止させる。もしプッシングの反則をするとすぐ相手選手に頭を下げてあやまり、実に気持ちがよかった。これは名監督クンストの指導によるものである。

日本はルーマニアに敗れて1勝2敗となり、ソ連、ノルウェーと同率となった。しかし大会規定によりソ連が2位となって準決勝リーグに進み、日本とノルウェーは失格した。(大会規定とは総得点を総失点で割り、得点の多いチームが上位となる)。

他グループの戦績

「A組」(ゴットワルドフ)

▽3月6日
西独 14（6―6、8―8）14 ユーゴ ＝引き分け＝
東独 20（12―5、8―4）9 米国

▽7日
ユーゴ 22（9―1、13―2）3 米国
西独 12（5―5、7―5）10 東独

▽9日
西独 24（15―6、9―7）13 米国
東独 14（4―7、10―7）14 ユーゴ ＝引き分け＝

「B組」(ブラチスラバ)

▽3月6日
スウェーデン 15（7―4、8―4）8 ハンガリー

▽7日
アイスランド 16（8―3、8―5）8 アラブ連合
ハンガリー 16（7―6、9―3）9 アラブ連合

▽9日
アイスランド 12（5―5、7―5）10 スウェーデン
スウェーデン 26（12―8、14―3）11 アラブ連合
ハンガリー 21（12―4、9―7）11 アイスランド

「C組」(プラハ)

▽3月6日
チェコ 24（12―5、12―7）12 フランス
デンマーク 16（7―8、9―5）13 スイス

▽7日
スイス 15（6―8、9―6）14 フランス
チェコ 14（7―4、7―7）11 デンマーク

▽9日
チェコ 26（11―7、15―3）10 スイス
デンマーク 26（13―8、13―5）13 フランス

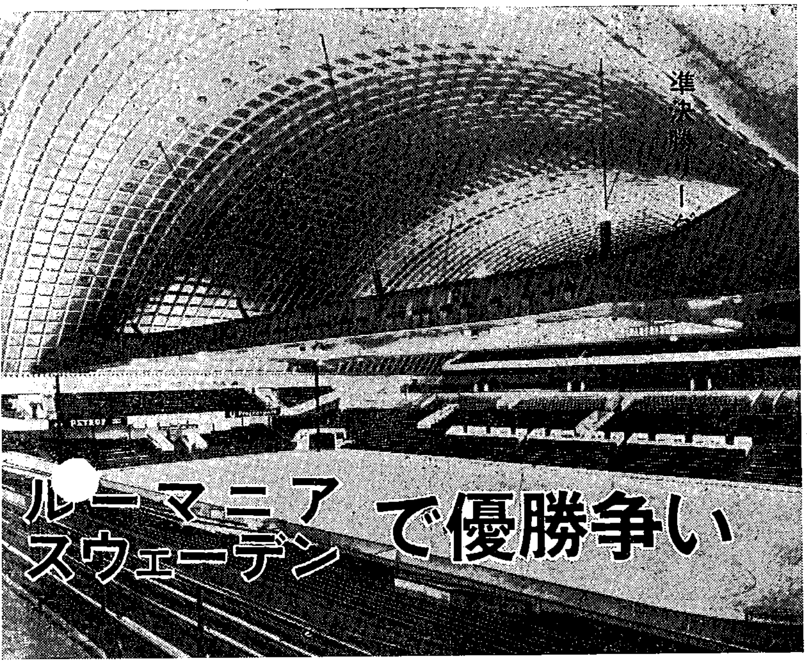
A組	勝数	負数	引分	得点	失点	勝点
1. 西独	2	0	1	50	37	5
2. ユーゴ	1	0	2	50	31	4
3. 東独	1	1	1	44	35	3
4. 米国	0	3	0	25	66	0

(注＝勝ち2点，引き分け1点)

B組	勝数	負数	引分	得点	失点	勝点
1. スウェーデン	2	1	0	51	31	4
2. ハンガリー	2	1	0	45	36	4
3. アイスランド	2	1	0	40	39	4
4. アラブ連合	0	3	0	28	58	0

C組	勝数	負数	引分	得点	失点	勝点
1. チェコ	3	0	0	63	35	6
2. デンマーク	2	1	0	53	40	4
3. スイス	1	2	0	38	56	2
4. フランス	0	3	0	41	64	0

D組	勝数	負数	引分	得点	失点	勝点
1. **ルーマニア**	3	0	0	70	36	6
2. **ソ連**	1	2	0	65	39	2
3. **ノルウエー**	1	2	0	37	47	2
4. **日本**	1	2	0	40	90	2



準決勝リーグはプラハに8チームが集結し、11日からAB両ブロックに分けて行なわれた。地元チェコチームの出場とあってプラハ体育館は一万八千人の観衆で大入り満員。日本ではちょっと想像もつかない。この体育館は実にりっぱである。ドーム式の天井、両サイドの観覧席は4階まであり。照明設備も申しぶんない。フロアーは板張りで緑色、パルドビッチの体育館と違って暖房設備が整っていてオーバーがいらないほど。記録席は観覧席の最前部にあり、反則退場者の席もある。出場選手は記録席の真向いの通路から4列になって入場、審判団はレフェリーのほかゴールジャッジ2人、ラインズマン2人の計5人。日本選手団は記録席の左隣りの最前列で観戦した。

西独、不覚の1敗

▽11日（カッコ内は第1次リーグの順位）

「A組」

ハンガリー（B組2位）19（12―8，7―7）15 西独（A組1位）

得	（西　独）	（ハンガリー）	得
0	ロスナー	フェンヨ	6
1	グリル	ビフ	2
5	バーハルツ	バークシー	0
0	スチルマン	アドリアン	4
5	ルブキング	コバクツ	1
1	ルーカス	ラーツ	3
3	ミュレイセン	スチラー	1
0	シュウェンカー	タマスデー	1
0	グラフ	バランヤイ	1
0	バルテルス		
0	デルフス	GK コバスク	0
15	（3）	7MT （2）	19

〔評〕西独は立ち上がりから元気なく、得意の速攻が出なかった。シュートそのものにスピードがなく、ディフェンスもなにかもたついていた。ハンガリーは西独のすきをついて速攻をかけ、この速攻が効かなくなるとこんどはポストプレーに切り替えて西独を圧倒した。西独は前半28分に初めて6―5とリードしたが、ハンガリーのラフプレーに気遅れして前半7―7のタイスコアにされた。後半になるとハンガリーは攻勢に出て9分に11―9とリードした。そして長いパスを続けて西独にボールを渡さず、西独をじらしながら自分のペースに巻き込んだ。西独はディフェンスを5―1、4―2とうまく使い分けながらハンガリーのロングシュートを押えていたが、23分、24分の二回にわたってカットされて逆襲を許し17―13と引き離された。この4点のアヘッドは西独にとって痛手となり、この差のままタイムアップとなった。西独は20分をすぎてから激しくアタックしたが、ばん回できなかった。

スウェーデン勝つ

スウェーデン（B組1位）23（13―7，10―11）18 ユーゴ（A組2位）

得	（スウェーデン）	（ユーゴ）	得
3	カンペルダール	ビドビク	0
5	カールソン	コーシャン	1
0	アーカーバル	デラネック	4
0	ヤールニース	サレンコバ	0
4	ヨハンソン	カラドザ	0
0	ダネル	ベゴビック	1
10	アルムクイスト	ミルコビック	3
1	ネドバル	ザグメスター	7
0	カールストローム	デカリス	2
0	リング GK	GK デリ	0
0	リンドブローム GK	GK モスタラック	0
23	（3）	7MT （3）	18

〔評〕ユーゴの出足は鋭かった。前半8分までにザグメスターが3点、デラネックが2点をあげて5―2とリードを奪った。早いパス、力強い突進力、ジャンプシュートなどでスウェーデンのディフェンスをもの見事に切りくずした。特にザグメスターはスウェーデンゴール前をよく走ってディフェンスをゆさぶり、チャンスメーカーとなった。しかしスウェーデンは少しもあわてず、自分のペースを保ちながら徐々にピッチをあげて行った。アルムクイストが強引とも思われるロングシュート、あるいはジャンプシュートを決めて差を縮めた。ユーゴもザグメスターの好打で1点を争うゲームとなり、前半ユーゴがやっと1点のリードを保った。

後半になるとスウェーデンはカールソン、アルムクイストの好コンビネーションで得点した。ユーゴGKの弱点をつくアンダーシュートがよく決まった。ユーゴは15分にビドビク、17分にデカリスが2分間退場するハンディーを背負い、スウェーデンに引き離された。この試合は実に荒っぽく、両チームで計7人の反則退場者を出した。

チェコ、闘志の勝利

「B組」

チェコ（C組1位）18（9―7，9―8）15 ソ連（D組2位）

〔評〕チェコは地元の声援で立ち上がりから堅くなっていた。ソ連のものすごいアタックに手を焼き、しかもソ連GKの好守にはばまれて得点できず、くやしがっていたほどだ。18分にトロヤンがうまいポストプレーで6―6と追いついてから急に調子を出した。22分ハフリクのシュートで初めてリ

得	（チェコ）		（ソ　連）	得
1	ベネス		エリック	2
2	マレス		R・ユーリ	1
4	ジャコフ		バレリー	2
2	フロロ		ビタウタス	2
4	ハリフク		アルベルタス	1
0	ヘルマン		T・ジマル	3
3	トロヤン		ゲオルギー	3
2	ラゼク		ミクナイル	1
			Z・ユーリ	0
0	ビシャ	GK	A・ジマル	0
0	アルノスト	GK	バレンチン	0
18	（6）	7MT	（4）	15

ードし、プレーに余裕が出てきた。ソ連の攻撃は相変わらず激しく、前半3人の反則退場者を出す荒いプレー。チェコはこのソ連のプレーに怒り出し、試合はエキサイトした。一万八千人の観衆が一斉にチェコに声援を送り、広い館内はわき返った。チェコも次ぎ次ぎと3人の反則退場者を出せば、ソ連はいちじは4人攻撃、4人防御に追いやられた。このソ連の4人攻撃がチェコにうまくつけ込まれた。前半1点だったが、この差がソ連にとって負担となった。

後半1分ソ連はエリックのシュートで9—9と追いついたが、チェコは自分のペースで試合を進め、少しもあわてなかった。そして10分から20分の間に4点をあげた。この間のソ連は19分にT・ジマルの7メートルスロー一本だけ。チェコのディフェンスは厚く、ソ連が激しくアタックしても効め目がなく、逆に押しつぶされてチャンスがなかった。この差が最後まで響き、ソ連はばん回できなかった。この試合のレフェリーは西独のシュナイダー氏、彼のジャッジは実にうまかった。ソ連選手がレフェリーの目をごまかそうとしたが、シュナイダー氏の目は少しも狂わなかった。ソ連の荒いプレーは結局反則退場者を出す破目になった。選手の動きをよく見ていたし、きわどいプレーにたいしても少しもためらわずにゼスチャー入りで判定をくだしていた。エキサイトした試合には、レフェリーが落ち着いたジャッジをすると心が休まる。とにかくうまいレフェリーだった。

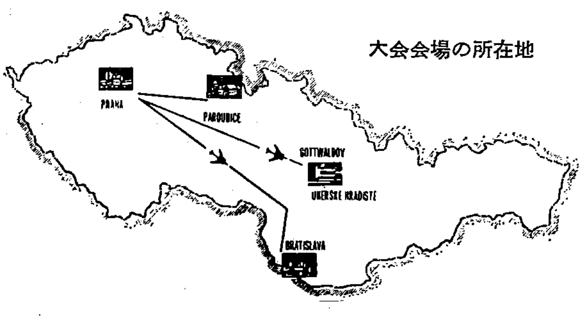
さすがはルーマニア

ルーマニア（D組1位）25（10—7, 15—8）15 デンマーク（C組2位）

得	（ルーマニア）		（デンマーク）	得
1	ヤコブ		サンド	1
0	ポペスク		ペテルセン	3
4	ナデア		J・O・ハンセン	5
10	モーゼル		アンデルセン	0
1	ナト		ベルンス	2
1	グルイア		クラメル	0
2	オテレア		M・ニールセン	3
0	コスタケII		J・P・ハンセン	0
6	イワネスク		スカーラップ	1
0	レドル	GK	ホルスト	0
0	タレ	GK		
25	（3）	7MT	（4）	15

〔評〕ルーマニアの勝利は順当。スローオフ後30秒にモーゼルが中央からゲットして先取点をあげた。このあとしばらく互いに出方を見ていたのでチャンスがなかった。やっと4分30秒にイワネスクが目もさめるようなジャンプシュートでルーマニアが2—0とリードした。ルーマニアはデンマークのゴール前で早いパスをみせ、少しでもスキがあるとチャンスをつくった。デンマークはルーマニアの厚いディフェンスの壁に苦戦し、フリースロー・ライン後方から苦しまぎれのロングを打つだけ。4分50秒から8分までにサンド、ベルンス、J・P・ハンセンのロングが成功していちじは3—2とリードした。その後20分まで1点を争うシーソーゲームを展開した。ルーマニアはこのロングをつぶすため、ディフェンスの詰めを早くしてデンマークのロングを封じた。このあたりルーマニアのうまさが光った。デンマークは20分から前半終了まで無得点、ルーマニアは全選手とも自分のペースをよく守り、モーゼルの好打で前半10—7とリードした。

後半のルーマニアは4分までにオテレア、モーゼルのシュートで13—7と安全圏にはいった。デンマークもしきりにロングを飛ばして食い下がったが、ロングシューターのサンドにコントロールがなく、J・P・ハンセンひとりではルーマニアに歯が立たなかった。デンマークはフェイントパスの連続でルーマニアのディフェンスをくずそうとしたが、ルーマニアはその手に乗らなかった。ルーマニアは基本技術を完全にマスターし、デンマークよりはるかにうまい。また他のチームはレフェリーにGKの交代を通告しなかったが、ルーマニアはクンスト監督が自らレフェリーに通告してGKを交代させていた。ルールをよく守るところはさすがである。



大会会場の所在地

▽13日

ユーゴ逃げ込む

「A組」

ユーゴ（A組2位）16（9—7, 7—8）15 ハンガリー（B組2位）

〔評〕前半両チームとも堅くなりすぎておもしろくなかった。互いにブロックプレーが多く、前半だけで6回も7メートルスローがあった。プレーは荒く、取り上げるものはひとつもなかった。長くローリングパスを続けてチャンスを待つ消極的な戦法。ユーゴは8分に3—1とリードしたが、このあと21分まで得点なく、ハンガリーにじわじわ攻められて20分には5—3と逆にハンガリーがリード。ユーゴは21分から29分までフリースロー、ジャンプシュート、ノーマークシュートなどで9—7と逆転に成功した。

後半になるとハンガリーはアドリアン、フェンヨに打たせ、17分には15—14と1点差に詰め寄った。20分にユーゴのザグメスターが2分間退場し、このスキをねらってハンガリーはスチラーのロングで15—15とし、試合はふり出しに戻った。ここから激しい攻防戦を展開、ゲームは荒くなるばかり。互いにサイド攻撃を忘れ、やたらに正面からロングを打つだけ。ハ

得	（ユーゴ）		（ハンガリー）	得
2	ステファノビク		フェンヨ	5
1	デラネック		ビフ	0
0	ビドビク		アドリアン	4
0	ビカン		コバクツ	0
0	サレンコバ		ラーツ	1
6	ミルコビック		スチラー	3
0	コーシャン		タマスデー	0
1	カラドザ		バランヤイ	0
6	ザグメスター		ドロブニー	1
			クレイン	1
0	モスタラック	GK	コバスク	0
0	パンヤニン	GK		
16	（4）	7MT	（4）	15

ンガリーにとって痛かったのは22分30秒にクレインが反則退場したこと。これが敗因となったといっていい。ユーゴは激しく攻め、24分フリースローのポイントに立ったカラドザがザグメスターにパスしてからうまくポストにはいった。そしてカラドザからのリターンパスを受け、ふり向きざまに殊勲のシュート。これが見事に決まって16―15。残り時間6分をがっちり固めてそのまま1点差のまま逃げ込んだ。

スウェーデン敗れる

西独（A組1位）16（8―5, 8―3）8 スウェーデン（B組1位）

（スウェーデン）	得
カンペルダール	2
ヨハンソン	0
アルムクイスト	3
ネドバル	1
カールストローム	2
ヤールニース	0
グスタイソン	0
ダネル	0
GK リンドブローム	0
(4)	8

得	（西独）
1	グラフ
1	グリル
4	ホニジ
2	ランジェ
6	ルブキング
0	ルーカス
2	ミュレイセン
0	シュウェンカー
0	B・ストラック
0	デルフス
16	(6)

16　（6）　7MT　（4）　8

〔評〕この試合は見ていて気持ちがよかった。プレーが実にきれいで、東欧諸国のチームに比べてスマートだった。両チームとも基本プレーを完全にマスターしているので、ソ連のような乱暴なプレーはひとつもなかった。しかもファインプレーが多く、とくに両チームのGKの好守は見事だった。西独は自分の真っ正面にいる選手から目を離さず、自分に与えられた任務を完全に果していた。簡単にできるようだが、なかなかできないものである。スウェーデン選手でほめていいのは相手ボールになったとき、ボールをその場にきちんと置いて守備についていたことである。これには感心した。試合は前半スウェーデンが健闘したが、後半西独がものすごいカット戦に出て速攻をかけ、ルブキング、ランジェの好打でスウェーデンを押えた。



西独スウェーデン，ホニジ（西独）のシュート

「B組」

ソ連勝つ

ソ連（D組2位）17（10―10, 7―4）14 デンマーク（C組2位）

〔評〕前半はデンマークが押していた。10分まではスカーラップのきれいなポストプレーが2本決まった。リターンパスのタイミングもよかったが、スカーラップの機敏な動きはりっぱだった。ソ連が2人でスカーラップをマークしているのに、これをふり切っての好プレーである。10分から20分までソ連の逆襲を受けたが、堂々としたプレーを続けた。デンマークはソ連のボディー・チェックに手を焼いていたが、少しもあせらずにマイペースで試合をしていたのはさすがは伝統あるチームだ。

後半互いに慎重になり、ボールキープが長くなった。したがってプレーそのものはおもしろみがなかった。17分まで両チームとも1点を取っただけ、勝負は残り13分にかかった。ソ連は激しい当たりでデンマークのディフェンスをくずし、T・ジマル、ゲオルギーに打たせて26分には17―14と3点をリードした。デンマークもJ・P・ハンセンにボールを回して反撃したが、ソ連の荒いプレーに振り回されたのは惜しかった。

得	（ソ連）		（デンマーク）	得
2	エリック		サンド	0
2	R・ユーリ		J・P・ハンセン	5
4	バレリー		アンデルセン	0
0	ビタウタス		スカーラップ	2
0	アルベルタス		M・ニールセン	4
4	T・ジマル		スベンドセン	1
5	ゲオルギー		グラベルセン	0
0	ミクナイル		J・ニールセン	1
0	Z・ユーリ		ペテルセン	1
0	A・ジマル	GK	ペデルセン	0
0	バレンチン	GK	M・ペテルセン	0
17	(1)	7MT	(4)	14



ルーマニアーチェコ，ベネス（チェコ）のシュート

チェコの善戦及ばず

ルーマニア（D組1位）16（9—7 7—8）15 チェコ（C組1位）

得	（ルーマニア）		（チェコ）	得
3	ヤコブ		デュダ	6
0	ポベスク		ベネス	1
0	ナデア		マレス	4
2	イワネスク		ハフリク	2
0	グルイア		ラダ	2
2	ナト		ヘルマン	0
6	モーゼル		トロヤン	0
2	オテレア		フロロ	0
1	コスタケII		ピトスラフスキー	0
0	レドル	GK	ビシヤ	0
0	タレ	GK	アルノスト	0
16	（1）	7MT	（4）	15

〔評〕事実上の優勝戦。定員一万八千人の体育館が大入り満員、主催者の公式発表によると入場者は一万八千五百人という。地元チェコへの声援はものすごかった。スローオフからタイムアップまでの60分間は口笛と歓声と怒号の連続。ヒイキの引き倒しの観があった。あまりいい感じはしなかった。もう少し冷静な気持ちになってゲームを見ていたら、あるいはチェコが勝っていたかもしれない。チェコ人の気違いじみた声援があったためかどうかはわからないが、試合の内容はそれほどよくなかった。この大歓声の中でルーマニアは少しも臆することなく、堂々とチェコに立ち向って1点差で勝ったのだから大したものである。前回は延長戦のすえ、チェコを破って優勝している。まさに貫録じゅうぶんであった。

スローオフからロングの打ち合い。10分までルーマニアが3—2とリードしたが、これはいずれもロングが決まったもの。チェコは大観衆の声援にのまれて堅くなり、動きが鈍かった。逆にルーマニアはのびのびとプレーしていた。この差が勝敗を決めたといっていい。ルーマニアは10分30秒にモーゼル・イワネスクのきれいなコンビネーションプレーで、13分にはモーゼルの巧みな低めのシュートで、15分30秒モーゼルのものすごいジャンプ、17分コスタケIIのカットからのノーマークシュート、18分30秒速攻からヤコブのノーマークシュートで8—3と5点差をつけた。わずか8分間におけるルーマニアの爆発的な攻撃力は実に見事なものであった。チェコは必死に反撃して前半2点差に詰め寄った。後半も10分まではルーマニアのペース。得点は14—9。ルーマニアはこの5点差でちょっと気を抜いた。というのはいたずらにボールを回して時間かせぎに出て、速攻が影をひそめた。チェコは徐々にピッチをあげ、17分には16—12と4点差。ルーマニアの動きは鈍くなるばかり。それにポイントゲッターのモーゼルが徹底的にマークされた。チェコは小柄のエース、マレスがゴール前を激しく走り回って自らチャンスメーカーとなった。ルーマニアのディフェンスはこのマレスの早い動きにとまどい、防戦一方に追いやられた。その間にチェコは21分ラダ、25分30秒マレスの好シュート、27分ラダの7メートルスローで16—15と1点差に追いついた。残り時間はあと3分。広い体育館はチェコの声援で割れんばかり。ところが28分にチェコのフロロが反則退場した。チェコの監督はベンチから飛び出してレフェリーに抗議。観覧席からファンがコートに降りて大騒ぎ。二階、三階から物が飛んでくる。観衆は総立ちになって口笛、怒号のうず。チェコにとってはフロロの退場は痛い。しかしレフェリーはチェコの抗議を一蹴して試合再開。（ルーマニアは15分30秒から1点も取れない）。残り時間は1分30秒。ルーマニアはゆっくりボールを回してストーリングにはいった。チェコは猛烈にアタックするが、ルーマニアは少しもあわてずに大きくボールを回しタイプアップ。レフェリーのホイッスルが館内に響き渡った。体育館は再び怒号、口笛のうず。レフェリーのホイッスルも聞えない。チェコのマレスはホイッスルが聞えなかったのか、単身ドリブルでシュートするほどだった。大観衆は帰ろうともせず、ルーマニア選手が抱き合って勝利を喜んでいるのを見て物を投げるなど大変な騒ぎだった。このゲームで見るべきものはルーマニアのモーゼルの好プレーだけ。事実上の優勝戦としてはちょっとお粗末だった。

準決勝リーグ順位

（A組）	試合	勝数	敗数	引合	得点	失点
1. スウェーデン	3	2	1	0	46	42
2. 西独	3	1	1	1	45	41
3. ユーゴ	3	1	1	1	48	52
4. ハンガリー	3	1	2	0	42	46

注＝西独，ユーゴは1勝1敗1引き分けの同率だが，大会規定（得点÷失点の上位）により西独が2位となった。

（B組）	試合	勝数	敗数	引合	得点	失点
1. ルーマニア	3	3	0	0	57	44
2. チェコ	3	2	1	0	47	41
3. ソ連	3	1	2	0	46	48
4. デンマーク	3	0	3	0	40	56

注＝準決勝リーグは2試合しかやらないが第1次リーグの成績1試合がそのまま適用される。たとえばルーマニア対ソ連戦はルーマニアが16—14で勝っているので，準決勝リーグでも試合はやらないが16—14でルーマニアの1勝として計算する。



〔優勝したルーマニアチーム〕＝中央は最多得点選手のモーゼル

ルーマニア、スウェーデンをふりきる

順位決定戦

▽14日（プラハ）

7—8位決定戦

デンマーク 23（15—8、8—6）14 ハンガリー

得	（デンマーク）	得	（ハンガリー）
3	サンド	7	フェンヨ
8	J・P・ハンセン	0	ビフ
1	アンデルセン	3	アドリアン
2	ペテルセン	0	コバクツ
0	M・ニールセン	2	ケスヤー
2	スベンドセン	1	マロシー
5	グラマー	0	タマスデー
1	J・ニールセン	0	バランヤイ
1	ペルンス	1	クレイン
0	ペデルセン（GK）	0	コバスク（GK）
0	ホルスト（GK）	0	デュパニ（GK）
23	7MT（2）	14	7MT（3）

〔評〕スローオフ直後から荒っぽいゲームとなり、前半6分までに両チームとも2人の2分間退場者を出す始末。お互いにポストにはいった選手のユニホームをつかんでブロックし、目の鋭いレフェリーに発見された。しかも5分のときはデンマークのペルンス、ハンガリーのグラマーが同時に退場を命じられた。したがってゲームの内容はお粗末だった。スピードもなければ盛り上がりもなかった。デンマークは前半13分までに5—1とリードし、15分以後はハンガリーはフェンヨのロングなどで2点差にした。後半デンマークはロング、アンダー、ポストと多彩な攻撃で8分までに16—7と大差をつけ、そのままハンガリーを押えた。この試合で反則退場者は9人（スウェーデン6、ハンガリー3）を出した。

チェコが3位

3—4位決定戦

チェコ 22（14—8、8—7）15 西独

得	（チェコ）	得	（西独）
0	ベネス	3	スチルマン
2	フロロ	0	グリル
4	マレス	1	ランジェ
2	ハフリク	2	ホニジ
4	ラダ	4	ミュレイセン
4	セルガ	2	ルーカス
0	トロヤン	1	バールツ
3	デュダ	0	グラフ
3	ラゼーク	2	B・ストラック
0	ビシャ（GK）	0	デルフス（GK）
0	アルノスト（GK）	0	W・ストラック（GK）
22	7MT（3）	15	7MT（3）

〔評〕西独はチェコのチャンスメーカーのマレスにかき回されてしまった。立ち上がりの2分にスチルマンのロングシュートで先取点をあげたが、このあとマレスに走られてディフェンスがくずれてしまった。マレスは頭はハゲ上がり、小さなからだだが実にすばしっこい。左サイドから右サイドへ、右サイドから左サイドへ一気に走り、西独をおもしろいようにゆさぶった。あわてる西独はマレスをつぶそうと前に出てくる。これでディフェンスが浮き、そこをチェコに攻め込まれた。前半の得点こそ8—7と1点差だが、試合内容はチェコの方が上回っていた。西独は不調ながら1点差に追いついたのはやはり実力か？。

後半はチェコのペースとなった。デュダのロング、ラダのポストプレーなどで10分までに14—9とリードし、このあとはマレスが走り回って西独を押えた。西独はスピードを欠いたうえ、パスが乱れて元気がなかった。



デンマーク対ハンガリー

5位にソ連

▽15日（プラハ）

5—6位決定戦

ソ連 27（14—9、13—9）18 ユーゴ

得	（ソ連）	得	（ユーゴ）
5	エリック	1	ビドビク
3	R・ユーリ	0	デラネック
4	バレリー	0	ケクマン
0	ビタウタス	2	カラドザ
0	アルベルタス	3	サレンコバ
8	T・ジマル	6	ブエゴビク
2	ゲオルギー	2	ザグメスター
3	ミクナィル	4	ミルコビック
2	Z・ユーリ	0	ステファノビク
0	A・ジマル（GK）	0	ドエリ（GK）
0	バレンチン（GK）	0	バンヤニン（GK）
27	7MT（2）	18	7MT（8）

〔評〕立ち上がりから互いにエースを徹底的にマークした。ソ連のZ・ユーリはユーゴのザグメスターを、ユーゴのカラドザはソ連のゲオルギーを完全にマークし、5人攻撃の5人防御となった。一万八千の観衆は一斉にユーゴに声援を送る。ソ連はR・ユーリがユーゴのゴール前をゆさぶってチャンスをつくり、T・ジマル、ミクナイルに打たせて前半リードした。後半のソ連はエリック、バレリー、T・ジマルの3人が思うぞんぶんロングをとばしてユーゴを押えた。ソ連のプレーは相変わらず荒いが、ジャンプしながら相手をブロックするプレーはうまい。手、足が空中で自由自在に動く勘はたいしたもの。ソ連GKのA・ジマルのプレーは本大会GKのNO1である。日本の福本よりも小さいが、実に鋭い反射神経を持っている。下は絶対に強く、腰から上は両手でじゅうぶん補っている。ジャンプ力もあり、こんな小さなGKがシュートのたびにファインプレーを見せ、ファンをびっくりさせた。

ナト、とどめの2点

―2位決定戦

ルーマニア 25（11―9, 14―13）22 スウェーデン

得	（ルーマニア）		（スウェーデン）	得
1	ヤコブ		カンペルダール	2
0	ポペスク		カールソン	3
3	ナデア		アカーバル	1
7	モーゼル		ヤールニース	4
7	ナト		ヨハンソン	2
3	イワネスク		コーリン	0
3	コスタケⅡ		アルムクイスト	7
0	オテレア		ネドバル	0
1	グルイア		カールストローム	3
0	レドル	GK	リング	0
0	タレ	GK	リンドブローム	0
25	（3）	7MT	（3）	22

〔評〕体育館は一万八千人のファンで大入り満員。試合は午後5時40分から開始。いつもスロースターターのルーマニアがこの試合で初めて最初からロングを打って出た。2連勝をねらう意気込みはすごかった。第1次リーグ、準決勝リーグを通じてルーマニアが積極的に攻めたのは初めて。しかもエースのモーゼルはこの試合で6点をあげれば本大会の最多得点選手に選ばれる。成り行きとしてモーゼルにボールが集まった。長身のモーゼルは軽いフットワークと大きなフェイントでスウェーデンバックスを圧倒し、思うぞんぶんジャンプシュートを打った。スウェーデンはカールソン、カールストロームの長身者を前面に押し立ててモーゼルに対抗した。平均身長はスウェーデンがまさっている。スウェーデンも負けずにロングを打った。ルーマニアは1分30秒、2分15秒にイワネスクが好シュートして2点、3分にモーゼルがゴール真っ正面からアンダーシュートして3―0とリードした。スウェーデンは4分にカールストロームの見事なジャンプシュート次いで5分にアカーバルのロングが決まって3―2とした。ロングの打ち合いで体育館は大いに沸いた。5分30秒モーゼルが7メートルスローを決めると、スウェーデンも6分カールソンのジャンプシュートで4―3といぜん1点差。スウェーデンのディフェンスはルーマニアのモーゼルをつぶそうとものすごいアタックに出た。8分10秒ルーマニアはナデアのジャンプシュート、9分30秒に早いパスからモーゼルのリターンパスを受けたコスタケⅡが左サイドからプロンジョンシュートしてルーマニアが6―3とした。スウェーデンもアルムクイストが10分30秒にゴール真っ正面からロング、12分にもジャンプシュートするなど激しく打ち合った。だが攻撃力ではルーマニアに一日の長があり、その後モーゼルが3点をあげて前半ルーマニアが1点リードした。スウェーデンのヤールニースは前半22分から2分間に3点をあげ、試合をおもしろくした。

試合の興味は後半に持ち越された。スウェーデンは1分30秒にカンペルダールが左サイドからむずかしいと思われたロングを決めて14―14とタイにした。ここでルーマニアはディフェンスを固めるとともに、シューターへの詰めを早くし、スウェーデンのロングを食い止めようとした。3分20秒ルーマニアのナトがスウェーデン選手をひっかけたため2分間退場。ナトはルーマニアの攻撃、防御のカナメである。ルーマニアの5人防御の手薄をスウェーデンがうまく攻め、4分アルムクイストが幸運にも7メートルスローを決めて15―14と初めてリードした。ルーマニアベンチは大いにあわて、5分にモーゼルが7メートルスローを失敗してしまった。このあたりルーマニアのあせりがよくわかった。ベンチのクンスト監督は立ち上がって指示を与えるほど…。ナトの2分間退場が解けるとルーマニアはがぜん元気を取り戻した。6分グルイアが正面からジャンプシュート、7分にはコスタケⅡのシュートがバーに当たってはね返えってくるのをモーゼルがすばやくゲットして再び16―15とリードした。15分にはモーゼルがノーマークシュートして20―17とルーマニアが3点リード。試合はこのままルーマニアが押し切ってしまうのではないかと思った。ところがルーマニアベンチはモーゼルをベンチに引き揚げさせた。これは3点差のためモーゼルに休養を与えたのだろうが、このすきにスウェーデンは猛反撃した。16分アルムクイストが左サイドからロング、17分ヨハンソンが7メートルスロー、18分10秒にカールソンがロングを決めてたちまち20―20の同点となった。

試合はいよいよおもしろくなってきた。ルーマニアベンチもスウェーデンベンチも監督が声をからして作戦を授ける。両軍選手は監督の指示を忠実に守った。24分にスウェーデンのヤールニースが右からロングを決めて22―22と三たび同点。ここでルーマニアはベンチにいたナトを送り出した。25分ルーマニアのイワネスクがアンダーシュートして23―22、26分30秒にナトがクンスト監督の期待にこたえて左45度の位置からロングシュートして24―22と2点差にした。ルーマニアのクンスト監督は思わずニッコリ。ナトは早い動きから28分に再び左サイドからロングを決めて25―22と3点差をつけた。勝負はここでやっと決まった。スウェーデンは必死になって反撃した。全員アタックに出てボールをねらったが、モーゼル、ナトらはうまく逃げて最後までボールをキープ。やがてタイムアップのホイッスル。ルーマニアは第4回大会に次いで2連勝した。ルーマニアは全選手が抱き合って勝利を喜び、クンスト監督はナトの手をがっちりと握った。なおモーゼルはこの試合で7点をあげ、今大会の最多得点選手となった。

（鴛尾）

世界選手権順位

1. ルーマニア
2. スウェーデン
3. チェコ
4. 西独
5. ソ連
6. ユーゴ
7. デンマーク
8. ハンガリー
9. アイスランド
10. 東独
11. **日本**
　ノルウェー
　スイス
14. フランス
　米国
　アラブ連合

欧州スナップ







右のカット写真は世界選手権のポスター（チェコ）

抽選で日本選手のサイン入りボールが当たったピクレス夫人、左はご主人のピクレス氏（上の写真）＝日本対ソショー選抜の試合で（フランス・モンペリアーで）

左はチハコバさんを囲む。左から渡辺団長、鷲尾役員、高嶋監督（パルドビッチ体育館で）

こぼれ……話…

紅一点チハコバさん

▽…チェコの通訳は19歳のお嬢さん。その名はチハコバさん。大学で日本語を勉強しているかわいい娘さんである。日本人のようにペラペラしゃべれないが、とにかく話が通じて英語の通訳よりいい。彼女の口ぐせは「なぜならば……」のことばがいつも飛び出る。「私はいまから委員会へ行ってくる。なぜならば……あすのバスの予約を決めてきます」といったように……。「なぜならば……私はパスポートが必要だから」「なぜならばあすの試合のコートを決めるから……」といったように。それをみんながマネをして「なぜならば……」を連発。「日本がノルウェーに勝った。なぜならばノルウェーより日本が強いから……」と彼女は言ったかどうか知らない。とにかく日本チームのマスコットだった。文字どおり紅一点。「東京オリンピックの通訳として行けるかもしれない？」と言っていたので、「来日したら歓迎会を開くよ」と選手団はポンと胸をたたいた。

雨のパリ見学

▽…パリ市内を見学した日はあいにくと雨。エッフェル塔もかすんでよく見えない。セーヌの流れなんてロマンチックな騒ぎじゃない。雨の中をとぼとぼと歩く。「チームの中に



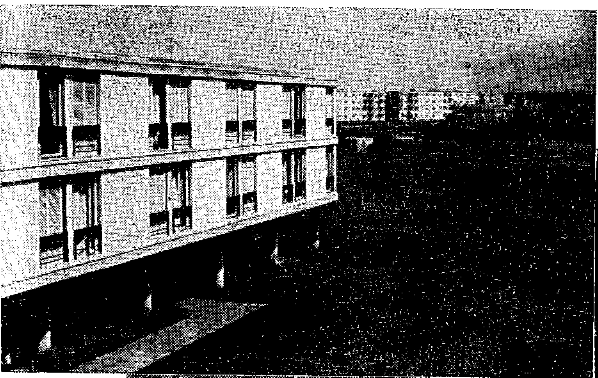


上は，日本ーストコフ炭鉱（チェコ）戦。日本チームはトレパン着用。右上は樹木に打ちつけられたスコアボールド。（ストコフで）

右下はルーマニア・チーム。（パルドビッチで）

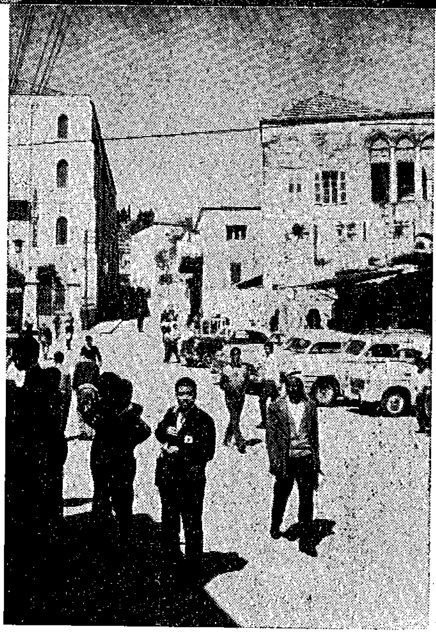


フランス　イスラエル　チェコ



〔写真〕下はテラビブのハンドボールコート
左は日本チームの宿舎マカビーホテル
左下はナザレの街の風景（以上イスラエル）





雨男がいるにちがいない」と声あり。「雨降って地固まるさ。プラハへ行けばきっといいことがあるよ」なるほど世界選手権で見事1勝をあげた。

×　×

×　×

世界選手権・日本チーム戦績

▷**第４回男子室内**(昭36. 3 西独)		
予選リーグC組	●10—38	チェコ
〃	●11—29	ルーマニア
▷**第2回女子7人制**(昭37. 7ルーマニア)		
予選リーグB組	●8—17	ハンガリー
〃	●7—12	デンマーク
順位決定リーグ	●10—16	ポーランド
〃	●6—15	西ドイツ
▷**第１回学生**(昭38. 1スウェーデン)		
予選ラウンドA組	●15—26	スウェーデン
〃	●11—34	デンマーク
〃	●9—31	スペイン

〔フランス〕

下はベルサイユ宮殿で（ひげの人はフランス協会役員。
左はフランスの巡査）
右は凱旋門前の北村君（フランス）





親善試合では8勝6敗

日本、第一戦失う

▽第1戦（2月21日、ナント市＝フランス）

ナント選抜 18（6—7 12—10）17 日本

得	（日本）		（ナント）	得
7	竹野		マリシェク	1
1	東		ブッション	1
1	田口		リーブレ	0
0	宮原藤		パーレ	2
3	北村		ドラブロス	7
4	住広		ロシャール	0
1	新		ブルジョア	2
0	井上		トビー	2
0	金田		ケムネ	2
0	福本	GK	ムナン	1
0	尾形	GK	シャンベル	0
17	（3）	7MT	（1）	18

〔評〕午後9時15分試合開始。観衆は二千五百人。広い体育館の半分がハンドボールコートである。フロアーは木煉瓦、スタンドは野球場のような板の腰かけ。入場料は5フラン（350円）。広さは40×20。ベンチにいる選手は縁台に腰かけ、足はコートの中に突っ込んでいる。サイドラインと観覧席がくっついているのでこんなことになる。あとでわかったことだが、フランス国内ではいずれもそうだった。レフェリーは少しも気にしない。日本ではちょっと考えられないことである。

ところで試合はどうか。日本選手は第1戦とあって少しあがっていた。だが第1戦のゲームとしては及第点といっていい。海外遠征二度目の選手はさすがに場なれしていた。ナント選抜の選手はローカルチームとはいえ、やはりハンドボールの盛んな地方とあってうまい。ボールを完全に握り、日本の防御陣、GKにボールを見せない。つまりボールを自分のからだのうしろにかくしてしまう。日本選手が前へ詰めると、手首を利用して自由自在にパス、フェイントをかける。倒れながらパスする。ボールにたいする執着心は強い。

前半は1点を争い、竹野の好打で7—6とリードした。前半15分ごろから竹野が徹底的にマークされた。ナント選抜はドラブロスのロング、ポストなどで反撃した。11分におもしろいプレーがあった。ナント選抜のシューターと日本選手がゴール前で衝突した。GK福本がこのプレーに気を奪われて一瞬はっとした。このときナント選抜の選手の手からこぼれたボールがころころと転がってそのままゴールイン。福本はあっけにとられていた。後半1分30秒北村のゲットで8—6としたが、ナント選抜は急にプレーが荒くなり、鋭くアタックしてきた。2分から4分30秒までに7メートルスロー、ノーマーク、ジャンプシュートなどで10—8とナント選抜がリード。日本もすぐ追いかけ、8分には11—10と日本リード。ところが日本は急にパスが乱れ、ナント選抜にカットされて速攻を許した。11分から15分30秒までにノーマークシュートで3点、速攻によるもの1点ポストプレーで1点と5点を失なった。これが日本の敗因となった。日本は16分から20分の間に住広のジャンプシュートで1点をあげただけ。日本はディフェンスを固めてナント選抜の突進を封じたので23分までナント選抜は得点できなかった。日本は竹野にボールを集めて反撃した。21分7メートル、23分ジャンプシュート、24分7メートルといずれも竹野が決め、27分住広のあざやかなポストプレーで17—16と1点差に追いついた。残りはわずか3分。ナント選抜は逃げの体勢、日本は必死に追撃。この3分間はおもしろかった。ナント選抜は28分にローリングパスからトビーがうまく右サイドに回り込み、倒れ込みシュートが決まって18—16と2点差になった。日本も28分30秒に竹野が中央からジャンプシュートして18—17。残り時間はあと1分30秒。日本はアタックしてボールをねらったが、ナント選抜は大きくボールを回して逃げ込みに成功。やがてホイッスル。日本はついに1点差に泣いた。しかし第1戦としてはよい出来だった。

日本、ソショーを破る

▽第2戦（2月26日、モンベリアー市ソショー体育館、二千人）

日本 26（14—11 12—12）23 ソショー選抜

得	（日本）		（ソショー）	得
10	竹野		ロカテ	0
2	東		マルシニーク	0
0	宮原藤		ルパチン	4
1	田口		マンテオ	1
1	北村		ドルモイス	4
6	住広		ファイブル	3
1	新		カリロン	0
5	井上		シルベストロ	3
			モウジェ	5
			エチェベリー	3
			ペリー	0
0	福本	GK	シルバン	0
26	（1）	7MT	（2）	23

〔評〕日本の勝因はソショーのポストプレーを徹底的につぶしたことである。日本のディフェンスはそれだけ成長したといっていい。ソショー選抜チームには1963年のフランス最優秀選手に選ばれたシルベストロをはじめ、エチェベリー、ペリー、ルパチンの国際級の選手がおり、クラブチームとしてはフランスNO・1である。とくにシルベストロ、エチェ

ベリーは3月の世界選手権出場選手になっている。一チームに4人の国際級の選手がいるのはこのチームだけである。この最強チームを破ったのだから、日本チームの力は実にりっぱなもの。大いにほめていい。日本は竹野、住広のロング、新、井上のポストプレーがよく決まり、ソショーチームは大いにあわてた。前半10分までソショーのペースとなって6―2とソショーが4点リード。15分をすぎると日本は速攻を展開し、20分には井上が右サイドから倒れ込んで8―8と追いついた。このあたりから日本は調子を出し、25分住広のロングシュートが決まって11―10と初めてリードした。日本は速攻の手をゆるめず、井上、東、住広が連続ゲットして前半14―11と3点差をつけた。ソショーはエースのシルベストロが兵役除隊間もないので練習不足がたたり、戦力となっていなかった。エチェベリー、ルパチンがカバーしたが追いつけなかった。しかしシルベストロの巧妙なパス、とくにバックパスはさすがにうまい。

後半1分、2分に井上がゲットしたが、1分30秒ドルモイスに7メートルスローを決められた。ソショーはゴール前での早いパスで日本の防御陣をくずそうとしたが日本はソショーの手のうちを読み取ってしまったので効果はなかった。このためソショーは作戦を変えてフリースロー、ロングシュートをしきりに打ち始めてきた。しかしGK福本の再三再四にわたるファインプレーで失点を最少限に食い止めた。福本のファインプレーは日本勝因のひとつといっていい。ソショーは手を変え、品を変えて反撃してきた。ポストプレー、アンダーシュート、フリースロー、7メートルスロー、ノーマークシュートで11分には18―18とタイスコアとなった。体育館は割れんばかりの大歓声。日本は北のうまいパスワークと、ゴール前のゆさぶりからチャンスをつかみ、14分30秒竹野、15分住広の好打で再び20―18とリードした。ソショーはあせり出してロングを打ってきた。日本も竹野に打たせた。日本は17分から28分までの11分間に竹野がひとりで5点をたたき出して、ソショーの追撃を見事に断ち切った。



ソショーチームの選手。左から2人目は63年フランス最優秀選手のシルベストロ選手＝ソショーで

日本、リヨンも破る

▽第3戦（2月28日、ビルフランシュ市体育館、二千人）

日本 25（13―10 / 12―10）20 リヨン選抜

得	（日本）	（リヨン）	得
8	竹野	パッケ	0
2	東	オンチナ	1
1	宮原藤	モアジ	1
1	田口	ヒッフィ	0
5	北村	キャラロ	5
6	住広	キュイェジテック	6
1	新	ジャノ	0
1	井上	ゴーチェ	1
		ムニエ	6
		リュイズ	0
0	福本 GK	ドンゼル	0
		オーレイ	0
25	（2）7MT	（2）	20

〔評〕午後9時試合開始が予定より1時間30分遅れて10時30分スローオフ。日本は立ち上がりから動きが悪く、思うように走れなかった。ゴール前のローリングパスは、静止したままのパスなので少しも威力がなかった。幸いことにリヨン選抜も動きが鈍かった。2分30秒に住広がゲットして1―0先行した。この直後の3分にリヨン選抜はキュイジェティックがフリースローを一気に決めて1―1。このフリスローはゴール前10メートルの地点から打ったロング

こぼれ話

◎テディ君は英語

▽…フランス滞在中の通訳はテディー君（学生）と塚原尭さん（日本画家）。テディー君の方は日本語はダメ、もっぱら英語である。このテディー君はフランス協会の役員とフランス語。テディー君と日本選手団とは英語で通訳する。団長の渡辺さんは英語が堪能なのでチームは大助かり。テディー君いわく。「フランス人は英語を少しもやらないんだ。僕は英語のほかにドイツ語を勉強しています」。なかなかの人気者で選手団から「ミスター・テディー」と呼ばれると大きな目玉をくりくりさせて飛んでくる。実にかわいい青年である。

◎食事は2時間

▽…フランスでの食事時間は長すぎてどうもタイミングが合わない。スタートからゴールインまで一時間半から二時間もかかる。食べているうちはいいのだが。次の料理が出るまで20分はかかる。食べてひと休みしているともう腹が空いてくる。うまそうな肉がくると、あっという間になくなってしまう。食欲おう盛なのかもしれない。朝はパンとコーヒーの軽食だが、ひると夜は肉食。それに水が飲めないので炭酸ソーダ入りのジュース。日本の食事とはまるっきり違う。明けても暮れても炭酸ソーダしか飲めない。「ああ、日本の水が飲みたい――」の声しきり。フランスでは水道の水は石炭分が多くて飲料水としては不適格。（?）。水は買って飲むわけ。ビールびん一本の水が約百十円につく。コップ一杯の水が三十円から四十円。そのつどチップを払うのだから〝ガブガブ〟飲めない。フランス語で〝エビアン〟または〝ビテル〟水ではほんとうに苦労した。

◎水で飛びあがる

▽…パリはオセアン・ホテルに泊まった。エレベーターは二人乗り。ただし一方通行で上にのぼるときだけ動き。五階でいくらボタンを押してもエレベーターは来ない。部屋をひと回りしたがバス（浴室）のついている部屋は数少ない。ほとんどの部屋はシャワーだけ。湯と水との調節を失敗すると、熱い湯が出て飛び上がり、水が出ると飛び上がってテンヤワンヤ。「日本のフロがなつかしいよ」。

◎顔を見ると〝ホス〟

▽…このホテルのマネジャーは頭がはげている。日常会話の「ボンソワール」「ボンジュール」はあまり使わず、だれが教え込んだのか知らないが、朝食のとき顔を合わせると「ホス」という。これは「オス」と教えたものが、うまく発音できないで「ホス」となまったもの。時間かまわず顔を合わせると「ホス」「ホス」の連続。これにはみんな大笑い。

である。このプレーはよかった。日本はこのプレーを大いに学ぶ点である。キュイジェティックはユーゴの選手である。フランスに招かれてコーチ（監督）をやり、自分もプレーする。5月にユーゴに帰るが、プロレスラーを連想させるりっぱな体格の持ち主である。日本は住広、竹野に打たせた。この間に北村がリヨンの防御陣をかき回してチャンスをつくり、着々と加点した。23分、24分に東がいずれも右サイドから決めて8−7とリードし、これを境いに日本は徐々にピッチをあげた。26分から29分までに宮原藤、北村、住広の速攻が出たし、29分には竹野が7メートルスローを決めて前半（12−10）を終わった。

後半は立ち上がりの1分、2分に住広のシュート、3分北村がノーマークで決めるなどして、日本得意の速攻を二千の観衆に見せつけた。この速攻に観衆は拍手を送った。4分にも住広がシュート。この日の住広の出来はすばらしかった。速攻に移るとき、竹野、住広がクロスして走り、リヨンを全く寄せつけなかった。この日本の速攻にリヨンはあせり出し、がむしゃらにアタックしてきた。からだが大きいので日本選手はちょっととまどった形。このため日本は4分から8分30秒まで得点なし。8分40秒北村の好走で17−13とリヨンを引き離した。日本の攻撃は鋭く13分までに3点をあげた。とくに井上がカット、ノーマークに成功したのはすばらしく、リヨンの選手はひとりも走らなかった。スコアは20−13と7点差、リヨンは5分30秒から8分間無得点。日本チームにこの連続した速攻が常時出れば、世界選手権が大いに楽しみ。リヨンは必死に追撃したが日本は防御を固めて2勝目をあげた。北村が得意の突進力をみせ、からだの大きいリヨンの選手の間を巧みに抜いてゲットしたプレーはすばらしかった。

日本、惜しくも敗れる

▽第4戦（3月1日、エブリュー市体育館、二千人）

フランス・ナショナル　27（13−7、14−6）13　日本

得	（日本）		（フランス）	得
5	竹野		シャスタニ	2
1	東		シルベストロ	4
0	宮原藤		M・ランベール	7
2	田口		R・ランベール	6
4	北村		エチェベリー	4
2	住広		ボルト	0
0	新		セルネ	2
0	井上		スリエ	2
0	金田		オワナン	0
0	福本	GK	フェリニャク	0
0	尾形	GK	アルムプロワスタ	0
14	（0）	7MT	（2）	27

〔評〕日本の完敗だった。敗因はいろいろあるが、その大きなものは動きが全く悪かった。ハーフタイムのとき、高嶋監督は「ナマリ（鉛）が足にくっついているんじゃないかな――」と頭を傾げたほどである。確かに日本は立ち上がりから動けなかった。フランス国内転戦の疲労もあるが、大観衆の声援にのまれたことも見のがせない。施設の完備した体育館にぎっしり詰めかけた観衆は日本では想像もできない。フランスナショナルチームにはソショー選抜チームの2選手がいた。フランスチームは3月の世界選手権に出場のため26日から強化合宿にはいっており、この日はベストコンディションだった。そこへ日本は疲労ぎみでぶつかったので、ひとたまりもなかった。しかもシルベストロらのソショー選抜チームの2人が雪辱の意気に燃え、立ち上がりからすばらしい攻撃を展開した。こうなっては日本に分がない。

試合は日本のスローオフで開始。前半2分にフランスはR・ランベールが左サイドからゴール前を走りながら好パスを受けて見事に決めた。4分にはM・ランベールがシュートして2−0、5分シルベストロが左サイドぎりぎりから倒れ込みシュート、5分30秒エチェベリーがノーマークシュートしてたちまち4−0。フランスは早いパスと3人の選手がポストにはいる。ポストにはいった3人は静止せず、入れ替わり立ち替わりして走り抜け、日本防御陣をゆさぶった。つまりトコロテン式に押し出しながら、つねに3人がポストにはいった。したがって日本は3人ないし4人でこの3人をつぶそうとする。そうするといたるところにスキができる。フランスはそこをねらってくる。日本はロングを警戒して一歩前に出て詰めるが、フランスは早いパスでこの詰めをはずし一気に攻め込んだ。さすがはナショナルチームである。動きの悪い日本は立ち上がりからフランスの猛攻に手が出なかった。せっかくボールをキープしてもスピードがないため得点にならず、13分には7−0とリードされた。これで試合の主導権は完全にフランスのもの。つまりこれで勝負が決まった。試合の興味はあと日本がどこまでやるかだけ。

日本は14分にやっと住広が左45度の位置からジャンプシュートして待望の1点をあげた。この1点で日本は堅さがとれ、15分竹野が中央からジャンプシュート、16分住友のパスを受けた北村がきれいに決めて反撃した(7−3)。日本はわずか2分間に3点をあげた。この実力を持ちながら14分まで無得点だったのは、やはり大観衆に圧倒されたのだろう。フランスは少しも力を抜かず、スタンディングシュート、左サイドからのシュート、さらに背の低い日本防御陣の弱点をついてジャンプシュートなど多彩な攻撃を見せた。日本はゴール前のゆさぶり戦法―クロスプレーを見せたが、このクロスがたった一回だけなのでフランスのディフェンスをくずせなかった。二回ないし三回連続のクロスパスでないと通じない。前半クロスプレーが成功して得点できたのはたった1点だけ。結局前半は14−6とフランスが大きくリードして安全圏にはいってしまった。

後半2分にフランスのR・ランベールがジャンプシュート。日本も3分にGK福本のボール出しがよく、竹野が右サイドからループシュートを決めた。フランスは積極的に攻め、5分から7分までの3分間に連続4点をあげて19−7。日本も11分にこの日初めて東がポストプレーを決め、14分住広のノーマークシュート、15分北村−竹野のコンビネーションプレーで加点、17分にも東のポストプレーがあった。しかしその間にフランスも追加点をあげ、スコアは23−11とフランスが12点リード。日本は前半に比べ後半は落ち着きが出てよく動いたが、前半の失点はあまりにも大きすぎた。後半10分から21分までに見せた速攻、ポストプレー、クロスプレーがつねに出るようにしたいものだ。とくにクロスプレー（パス）は欠くことのできないもの。これをマスターすればこわいものなし。また遠征ゲームではゴールインしなくても

いいから、ロングシュートをどんどん打って相手のディフェンス、GKをおびやかすことがポイントである。機先を制することがいかに大事であるかをフランスでの四試合で痛感した。

日本、やっと勝つ

▽第5戦（3月12日プラハ市ウルバヌ体育館）

日本 14（5—5、9—8）13 プラハクラブ

得	（日本）
5	竹野
0	東
0	宮原藤
1	田口
3	北村
2	住広
1	新
0	井上
0	宮原宏
1	金田
1	餅原
0	福本
	GK
14	

（注）＝プラハ・クラブはメンバーなし。

〔評〕この体育館は狭く、コートは赤土である。プラハでは珍しく明るい体育館、コートのすぐそばで陸上のハードル練習が行なわれていた。プラハクラブはプラハ市郊外のトロヤン町に住む軍人、警官、サラリーマンのクラブ。前半コートに慣れないためか出足が悪く苦戦した。後半17分まで13—11とリードされたが、18分から19分30秒までに竹野、金田の好打で同点とし、さらに新の決勝のシュートでやっと逆転に成功した。（この試合20分ハーフ）

住広6点をかせぐ

▽第6戦（3月12日、プラハ市ウルバヌ体育館）

日本 23（10—4、13—6）10 プラハ学生

得	（日本）		（プラハ）	得
3	竹野		ポドジニク	1
0	東		T・クリス	0
0	宮原藤		モラベツ	2
0	田口		J・クリス	5
1	北村		ブルダ	0
6	住広		コス	1
2	新		プロディク	0
3	井上		ナイマヌ	0
3	宮原宏		フロウダ	1
2	金田			
3	餅原			
0	福本	GK	フリドリチカ	0
0	尾形			
23	（4）	7MT	（2）	10

〔評〕第二試合は日本のペースとなった。餅原、金田、宮原宏、住広、新、井上の若手を起用し、ロング攻撃に出た。学生選抜はコンビが取れないうえに、ディフェンスの甘さをさらけ出した。ここを住広らの若手が思うようにシュートして大勝した。（20分ハーフ）

餅原大活躍

▽第7戦（3月15日、ロボシチェ市体育館）

日本 27（11—12、16—7）19 ロボシチェ選抜

得	（日本）		（ロボシチェ選抜）	得
7	竹野		ボールテリ	2
0	東		イエニコフスキー	0
0	宮原藤		ソロルニク	0
1	田口		リムベルク	1
3	北村		ポスコチル	4
7	住広		ズボジル	7
0	新		ダビド	3
1	井上		マルショーン	2
2	金田			
0	宮原宏			
6	餅原			
0	福本	GK	ロボフスキー	0
0	尾形	GK	ヘラー	0
27	（1）	7MT	（6）	19

〔評〕プラハから80キロ離れている小さな都市。ひなびた町だが山あり川ありで景色がいい。体育館は狭いが暖房設備があった。前座試合にバスケットボール、ハンドボールが行なわれた。日本は前半パスミスが多く、若手の出来はあまりよくなかった。結局竹野、住広にたよってしまった。後半から餅原が当たり出してロングを決めたのが光った。ロボシチェではズボジルの強肩がすばらしかった。親善試合のため日本選手にちょっと気のゆるみがあったようだ。

日本、ステラに惜敗

▽第8戦（3月17日、パリ郊外サンモール、ステラ体育館）

ステラ 25（14—12、11—11）23 日本

得	（日本）		（ステラ）	得
12	竹野		エクトール	3
3	東		ザグエル	2
0	宮原藤		カベー	0
1	田口		バンダン	4
3	北村		ロション	3
1	新		デゾッピ	1
2	住広		テキシー	1
0	井上		ヤコビディス	7
0	金田		プチ	4
0	宮原宏		モニエ	0
1	餅原		デシャン	0
0	尾形	GK	ランブロソ	0
0	福本	GK	シボ	0
23	（2）	7MT	（4）	25

〔評〕前半10分に尾形が左サイドから飛び込んできたプチの強シュートを右眼に受けてこん倒し、救急車でクレテイユ病院に入院する事故があった。このアクシデントのため、日本選手の動きはよくなかった。ステラはそれほど強いとは思えない。からだは大きいがスピードはあまりなかった。ステラの攻撃で注目するのはポストに2人はいって日本ディフェンスのゆさぶりをやったことだ。これで日本はコンビがくずれた。細かい技術そのものは日本の方がはるかにうまい。ステラは両サイドをよく使い、倒れ込みシュートが多かった。それに手首が強いので、どこからボールが出るのかまごつく。プチ、ヤコビディス、バンダンはからだの大きい割によく動いていた。フランス・ナショナルチームを除くとやはりトップクラスなのかもしれない。しかしそれほど恐れることはない。日本は前半の2点差が最後まで響いた。後半15分に竹野がフリースローを見事決めて19—19とタイにしたまではよかったが、15分から23分までノーゴール。この間ステラはプチ、エクトールが3点をあげて22—19。日本も東、竹野が追いかけたが、ステラはヤコビディスが連続3点を決めて日本の追撃をふり切った。

日本、ディジョンを破る

▽第9戦（3月18日、ディジョン市体育館）

日本 22（10—3、12—14）17 ディジョン選抜

〔評〕試合開始は夜9時、観衆は約三千人。ディジョン大学に留学中の加納誠三君（岡山青陵高出身）が応援にきた。試合は前半日本のワンサイドとなりリードした。しかし11分から23分までノーゴールはちょっと物たりなかった。ディジョンはスピードがなく日本バックスを破れなかった。ところが後半になるとポストプレー、ロングをうまく使って反撃してきた。日本も前半よりも動きがよくなり竹野、餅原が決めていた。ディジョンはフォアニエル、ヘンレクに打たせて食い下がったが、前半の7点差が大きかったためどうすることもできなかった。日本はこの試合でフランスでのスケジュールを全部終了した。

得	（日本）		（ディジョン）	得
8	竹野		デュチン	1
0	東		トルナルス	0
0	宮原藤		ランテリー	0
0	田口		フォアニエル	9
4	北村		ポアトイ	0
5	住広		ゲルボイ	0
0	新		ボエス	2
0	井上		ヘンレク	5
1	金田		ソロノ	0
0	宮原宏		チョリス	0
4	餅原			
0	福本	GK	ミッチェル	0
22	（1）	7MT	（4）	17

日本、最終戦飾る

▽第10戦（3月21日、テラビブ屋外コート）

日本 20（12—9、8—7）17 イスラエルナショナル

〔評〕イスラエルは長身者が多く、シュートもかなり強烈だった。シタウ、ハルペリンは左利きで、シュートもコントロールがあった。最初のうちシュートはほとんどフ

得	（日本）		（イスラエル）	得
9	竹野		イルシャルミー	0
1	東		タウ	4
1	宮原藤		ミハイル	7
2	田口		ハルペリン	1
1	北村		ラングワイル	0
4	住広		アザリオダ	4
1	新		フランケンシュタイン	0
0	井上		チェスラー	0
0	金田		マンダレル	0
0	宮原宏		リオイド	0
1	餅原		サンドラ	0
0	福本	GK	セラ	0
20	（2）	7MT	（2）	16

リースローからのものが多かった。これはいずれもカットされてダメ。イスラエルは速攻がなく、それにパスが弱かったので日本にカットされてチャンスをつぶしていた。ハンドボールの基本技術が未熟であることがよくわかった。たとえばパスにしてもバスケットボールのドリブルパス、両手パスを使い、中央に突っ込んでくることはしなかった。パスを大きくして日本のディフェンスを前に引き寄せる作戦だけ。日本は竹野がうまいジャンプシュートでイスラエルのGKをほんろうしていた。この試合のレフェリーはお世辞にもうまいとはいえなかった。ホイッスルが多く、ゲームがしばしば中断した。フランス、チェコの親善試合とは全く違う。2分間退場のケースがあったが、これはいずれもフリースロー。日本はこのレフェリーにとまどっていた。

恐るべし、チェコの強さ

イスラエル 主審の判定に泣く

練習試合

▽第1戦（3月3日、プラハ郊外ストコフ市）

日本 45（22―2／23―3）5 炭礦ストコフ

得	（日本）		（ストコフ）	得
6	竹野		コラーズ	0
2	東		クレイーチ	0
1	宮原藤		フロリーク	0
3	田口		フィリップ	0
12	北村		サララ	0
8	住広		シーペック	1
6	新		キンツル	0
4	井上		クラートキー	0
0	宮原宏		シュマトラーク	0
0	金田		フォルマン	1
1	餅原		クラチナ	3
0	福本	GK	プラーゲル	0
0	尾形	GK	ベラン	0
45	（0）	7MT	（0）	5

〔評〕屋外のスケートリンクを急改造したもので寒かった。コートの回りには雪が積っており、零下5度の気温。日本チームはトレーニングパンツをはいてゲームをやった。炭礦のクラブチームなので日本の相手ではなかった。世界選手権の肩ならしといったゲームだった。

▽第2戦（3月4日、プラハ）

チェコ・ナショナル 40（21―1／19―6）7 日本

〔評〕世界選手権で優勝をねらうだけあってチェコの力は大したものだった。体格、体力、スピード、握力、厚いディフェンス、ジャンプ力とすべての点でチェコがすぐれていた。日本は最初からチェコのスピードに気遅れしてしまった。ベネス、マレス、ジャコブ、トロヤンの走力はすばらしいものがあった。ラフプレーで小さな日本選手は突き飛ばされ、手のほどこしようがなかった。チェコの選手は平均した得点力を持っている。これからの世界選手権に出場するにはスピードはもちろんだが長身者であること、だれでも得点できること力をつけることが大事だ。それがこのゲームでよくわかった。

得	（日本）		（チェコ）	得
5	竹野		ベネス	5
0	東		マレス	4
0	宮原藤		ジャコブ	8
0	田口		フロロ	4
1	北村		ハフリク	4
0	住広		ラダ	3
1	新		ヘルマン	4
0	井上		トロヤン	5
0	宮原宏		デュダ	3
0	金田		ブルナ	0
0	餅原		ラゼク	0
0	福本	GK	アルノスト	0
0	尾形	GK		
7	（0）	7MT	（2）	40

▽第2戦（3月13日、プラハ）

アラブ連合 23（11―10／12―5）15 日本

〔評〕日本はパスミスの連続でアラブ連合の速攻を許して自滅した。日本のパスは短いうえにスピードがない。しかもハンドリングが悪かったので最低の出来だった。ベテラン竹野、東がブレーキとなり、これが敗因となった。東をはじめ二、三人の選手が両手でパスしていた。外国チームとの試合でこのパスをしていたら、カットされるだけ。パスは片手でスピードをつけ、フェイントをかけないと通らない。これからは両手パスを禁止するのがひとつの課題といっていい。

後半18分にやっと14―14とタイにしたが、このあとまたパスミスを繰り返した。19分から25分までの6分間に8点を取られて万事休す。

得	（日本）		（アラブ）	得
4	竹野		カデル	3
2	東		K・チャフェイ	3
0	宮原藤		S・チャフェイ	2
1	田口		ナガール	1
1	北村		アリン	5
4	住広		モハメッド	2
2	新		ハジ	2
0	井上		シャルブ	0
0	宮原宏		ヘムダ	0
0	金田		ドウェニ	0
1	餅原		アーメデン	2
0	尾本	GK	ラーミー	3
0	福形	GK	ハッサン	0
15	（1）	7MT	（1）	23

▽第4戦（3月23日、レホボッド屋外コート）

イスラエルナショナル 13（8―6／5―5）11 日本

得	（日本）		（イスラエル）	得
6	竹本		ラングワイル	3
0	東		イルシャルミー	1
0	宮原藤		タウ	1
0	田口		フランケンシュタイン	0
2	北村		マンダレル	1
3	住広		ヤーコフ	1
0	新		チェスラー	0
0	井上		カッツマン	3
0	金田		サンドラー	2
0	宮原宏		マルクス	1
0	餅原		ハルペリン	0
0	福本	GK	シュタンペーター	0
11	（2）	7MT	（2）	13

〔評〕この試合のレフェリーは実にお粗末だった。前半4分までに速攻で4点を入れると、急にジャッジが変わってきた。つまりイスラエルに勝たせようとする気持ちが露骨に表われた。これには驚いた。東がポストにはいるとすぐ「ラインクロス」と判定する。このラインクロスはイスラエルバックスのプッシングによるものだが認めない。ついにこのゲームにはポストプレーが一回もなかった。ポストにはいればラインクロスとなるので日本はロングに切り替えざるを得ない。日本は前半10分30秒までに住広3点、北村2点だけ。残りの19分あまりは得点できなかった。イスラエル選手がプッシング、ホールディング、ラインクロスしても笛を吹かない。これで日本選手はすっかりくさり、高嶋監督はハーフタイムのときにレフェリーに注意したほど。渡辺団長もあきれ顔で「このゲームはイスラエルが勝つ」と言うほどだった。後半の日本は竹野がひとりで6点（うち2点は7メートルスロー）をあげたが、レフェリーは平然としてイスラエルチームに有利な判定をくだし、そしてイスラエルは勝った。

○

このほか、2月25日クーベルタン・スタジアムでフランス陸軍チームと試合した。日本はAB、フランスはABCに分けてリーグ戦形式。各10分ゲーム。

日本 30	B	A	B	A	B	A
	5	3	4	10	5	3
	―	―	―	―	―	―
	6	4	6	2	5	6
29 フランス陸軍	B	C	A	B	C	A


PARIS
ボーイング707ジェット機が
東京から毎日就航！
（但し月曜日を除く）
■ヨーロッパの玄関—パリ
パリはヨーロッパの政治、経済、文化の中心で、ローマ、ハンブルグと共にヨーロッパ旅行への最も便利な玄関になっています。
■パリの玄関—オルリ空港
ヨーロッパでいちばん新しく、規模の大きいオルリ空港は、その設備も極度に合理化された近代的な空港として定評があります。また空港ビルには世界で最も完備した免税ショップが開店しました。ここでは品物によっては市価の半値以下でお買物をなさることもできます。
■エール・フランスは日本人駐在員を配置
海外旅行をされる日本のお客様のためのサービスの一端としてエール・フランスではヨーロッパ各地に22名の日本人駐在員を配置しております。パリでは、オルリ空港とシャンゼリゼ営業所に日本のお客様専用のカウンターを特設し、みなさまのおいでをお待ちしております。
エール フランス
東京都千代田区日比谷三井ビル TEL (501) 6331 (代表)
大阪市東区大川町淀屋橋勧銀ビル TEL (202) 3326 (代表)
名古屋市中村区堀内町 毎日ビル502号室 TEL (54) 0540

世界選手権大会から

驚くべき体格・体力の相違

ボールを完全に握れ！

鷲尾武治

日本が1勝をあげ、やっと世界への仲間入りできたのはよかった。これまでの苦労がいっぺんに吹き飛んだといっていいだろう。この1勝で楽観はできない。次の大会で再び日本が勝利をあげることが、必ずできるかどうか疑わしいからだ。しかし少なくても次の大会で勝てるように努力しなければいけないし日本協会の首脳部も大いにがんばってもらわねばならない。プラハ入りするフランスでの国際試合が大きくプラスしたことは否定できない。わずか4試合だったが、国際級選手が人もいるツショークラブを破った自信は大きかった。1963年度フランス最優秀選手のシルベストロ以下の選手をあっと言わせた日本チームのプレー。パルドビッチの第1戦ではこれ以上のプレーが生まれた。

ピカール氏が予言

〇…チェコへ行く前にフランス協会のピカール理事長がこんなことを話していた。「(1)東欧諸国は強い。(2)北欧は弱くなっている。(3)優勝は地元の利でチェコ。だがルーマニアとチェコの力の差は同じ(4)日本は第1次リーグでノルウェーに勝てそうだ」――このうち(1)と(4)が当たってしまった。ピカール氏が「日本はノルウェーに勝てそうだ」と公表したとき、実のところ私は信じられなかった。ひょっとしたら勝てるかもしれないが、しかし勝てる根拠はひとつもなかった。「北欧チームは弱くなっている」と言っていたものの、スウェーデンは2位となり、ノルウェーはソ連を破っている。北欧は弱いどころの騒ぎじゃない。日本の勝利は実にラッキーだったわけである。すべての条件が日本にプラスしたのだ。これは日本―ノルウェー戦の評の項にくわしく書いてあるので省略する。ピカール氏のことばに元気づけられて日本チームは〝上を向いて……〟堂々とプラハ入りした。いまから思うとこれがよかったのだと思う。「こわいもの知らずの勝利」といってもいいのではないか。それにもましてノルウェー戦のときの日本チームはすばらしいゲームを見せた。私はスタンドで見ていたのだが、スローオフ後3分してから「これは行ける」と感じた。ところが渡辺団長、高嶋監督はスローオフ後30秒で「ノルウーに勝てる」と確信したというから、日本チームのプレーがいかによかったがおわかりのことと思う。

身につけよ日本独特のプレー

〇…フランス、チェコでのゲームで気がついたことを書いてみる。それは日本とヨーロッパチームとの差がどのくらいなのか。あらゆる角度から見てみよう。遠征ごとに感じることだろうが、第一に〝からだ〟の違いである。これは先天的なことだから、いますぐ変えることはできない。身長差ばかりでなく、日本選手にくらべてヨーロッパ選手はひと回りもふた回りも大きい。たくましい骨格、太い腕、強い足腰、練習で鍛え上げた強いジャンプ力、スピード、体力。すべての点で日本は劣っている。日本がヨーロッパ選手をリードするものは細かく早い動きだが、ヨーロッパ選手は大きなからだを実にうまく使いこなしている。からだが柔かいので自由自在にからだが動き、プレーが連続して出る。日本選手が一つのプレーをやる短い時間帯に、ヨーロッパ選手は二つないし三つのプレー出る。したがってボールが止まっていることがない。そればかりでなく、攻撃の6人の選手がボールと一緒に動いている。極言すればボールが選手を動かしているわけだ。そこへ行くと日本選手のプレーはかなりレベルが低い。少なくとも3年は遅れている感じがした。しばしば動きが止まり、ボールが完全に死んでいる。これではからだの大きなヨーロッパ選手のディフェンスは破れない。私はヨーロッパ選手のマネをしろとは言わないが、少しずつでもそれに近ずいて行くことを希望する。パルドビッチでルーマニアのクンスト監督は日本チームについてこう話

していた。「日本チームは1961年当時に比べるとものすごくうまくなった。これには驚いた。第一に動きがいい。第一戦のノルウェーに勝てたのは当たり前で、むしろ負けたらそれこそふしぎだ。ハンドボールではからだの大きいのがひとつの戦力だが、日本チームはそうはいかない。日本チームはからだが小さいが、小さければ小さいなりに日本チーム独特のプレーをマスターすべきだ。これは忘れてはいけない。からだが小さいのに、ヨーロッパチームのプレーをマネするのはよくない。しかしヨーロッパチームの良いところをどんどん取り入れて行くことが大事である」。身長差、体力差はいますぐにやろうと思ってもできない。日本が世界制覇をのぞむならば、五年計画か十年計画を立ててからだの大きい選手、つまり身長185センチ程度の選手をかき集めて訓練しなくてはならない。

握力の強化を急げ

○…第二は握力の問題である。握力が強いことはボールを完全に握れることである。フランスやチェコのジュニアチーム（17〜18歳）のこどもでさえ、ボールを完全に握っている。手の大きい、小さいの問題ではない。手が小さくても握力が強い。そこへ行くと日本の選手は握力がない。たとえボールを片手で握っていても、それは不完全な握り方である。ホールディング、プッシングされると、ぽろぽろボールが落ちてしまう。外人選手はこんなプレーをしない。どんなに押されようともボールを離さない。ボールに対する執着心のおう盛なことは日本人以上であり、これにプラスされるのが強い握力である。ひとつの例をとって見てもわかるように倒れ込みシュートのとき、自分のからだがフロアーにつく寸前までボールを握り、GKの動きを見てから手首を効かしてのスナプシュート。それまでボールを握っている。ジャンプシュートのとき、ジャンプして打つ瞬間にプッシングあるいはホールディングされて体勢がくずれる。この場合日本選手だとボールを落とすケースが多いが、外人選手は滞空時間が長いうえにボールを完全に握っているので自由にパスする。からだの大小の差よりもこの握力の強さが特に目だった。ボールの大きさは日本製よりもわずかに小さい。小さいから握れるというものではない。「どうすれば強くなるか」とルーマニア選手にきいたら「それは訓練以外にない」と話していた。ボールを片手で握れなかったために日本は勝てる試合をいくつか失った。たとえばパスを見てもわかる。外人選手は片手パスが多く、両手パスはほとんどしない。片手パスはスピードがあり、相手にカットされない。ところが日本選手はボールを完全に握れないためか両手パスはスピードがなく、カットされる率が高く、これが逆襲を許すきっかけとなった。ボールの握り方もずいぶん違う。外人選手はボールに対して真上から握る。ちょうど5本の指ではさみつけるように持つ。それも第一関節だけである。日本選手は第三関節まで使い、ボールの面を自分の手の掌（ひら）に密接させている。つまり手の掌を全部使っている。日本選手の中には外人選手と同じように指先だけでボールを完全に握っているものもいたが、これを全選手がやらねばいけない。1967年の第6回大会まで3年ある。それまで日本全国のプレーヤーが握力を強くしておくべきだし、各チームの監督もこれを基本技術のひとつとして指導してもらいたいと思う。

◎日本ハンドボール協会懲罰委員会

懲罰委員会は理事長直接の諮問機関であり、ハンドボール関係者の本協会規定の違反行為、並びに提訴された諸問題に対して、調査、検討して理事会提出の原案を作成する。

日本ハンドボール協会懲罰規程

第一条　ハンドボールに係る各種の懲罰に関しては本規程による

第二条　〔アマチュア規程違反〕
アマチュア規程に違反した行為については次のように定める。
違反した個人および団体は、アマチュアの権利をはく奪する。
但し未知の違反または故意でない違反の場合には戒告、始末書、一定期間謹慎などを適用する。
一定期間謹慎後、その状況に応じて復帰を認めることができる

第三条　〔組織に対する違反〕
組織に対する違反行為は次のように定める。
組織（下部組織を含む）において脱退、除名、その他違反行為による離脱の場合は本協会組織内のいかなる組織からも除外される
離脱者がその組織に復帰を認められた場合はその限りではない

第四条　〔登録違反〕
登録違反に対しては次のように定める。
登録違反のあった場合は、その違反者並びに、その所属する団体は責任を負うものとする。

第五条　〔大会運営上の違反〕
(1)協会主催の全国大会に申し込み、抽選後の棄権は認めない。棄権したチームは、その日から向こう一年間本協会主催、または共催の公式試合に出場できない。（ただし、不可抗力の場合を除く）
(2)上記チームの推薦母体の責任者（ブロック理事、学連直接責任者、各都道府県責任者等）については別に責任を問う。
(3)全国大会に出場資格がある場合、それに出場を棄権したときは第二項を準用する。
(4)同一大会における（予選を含む）二重登録者または二重出場者は、プレーヤーとして、その時から向こう一年間公式試合の出場はできない。そのさいチーム責任者の責任を問う

第六条　〔審判員の違反〕
審判員が言動に不謹慎なことがあった場合はその資格を降格、またははく奪する。

第七条　〔審判員に対する違反〕
審判員に対し個人または団体がスポーツマンシップに反する行為をなした場合は、向こう一年間すべての公式試合に出場はできない。

第八条　その他
その他提訴、検討、調査などによって適時懲罰を適用することができる。

本規程は、昭和三十九年六月一日から適用。



Hテキサー



H・バンダン



G.ブリザール



イボン・シコ



プチモンゴベール
（フランス協会会長）

日本・フランス国際親善試合……

東京、大阪などで11試合

フランス会長 モンゴベリー氏も来日

日本—フランス国際親善ハンドボール大会は6月19日東京・早大記念会堂での第1戦を皮切りに7月15日の最終戦まで、約1カ月にわたり東京、横浜、名古屋、京都、大阪、下松、熊本、新潟の各市で11試合を行なう。フランスチーム（ステラ・スポーツ・クラブチーム）一行33人とフランスハンドボール協会のモンゴベリー会長（国際連盟副会長）、ピカール理事長の2人の計35人は6月17日羽田着、7月17日羽田発で帰国する。

フランスチーム日程表

月日	曜	試合	予定
6. 17	水		羽田着、ホテル（雅叙園観光ホテル）
6. 18	木		午前自由、13.00東京観光、18.00レセプション（光輪閣）
6. 19	金	○	午前自由、15.40試合（早大記念会堂）レセプション
6. 20	土	○	午前鎌倉、江の島観光、試合18.00（横浜文化体育館）
6. 21	日		朝食後箱根へ
6. 22	月	○	試合18.00（東京体育館）
6. 23	火		16.40上野発（急行とき）21.30新潟着、
6. 24	水	○	試合18.00（新潟市体育館）
6. 25	木		海水浴
6. 26	金		7.40新潟発、17.18京都着、（急行きたぐに）
6. 27	土		京都観光
6. 28	日	○	試合16.00（京都市体育館）
6. 29	月		朝食後大阪へ、大阪観光（宝塚ホテル火）
6. 30	火	○	試合18.00（大阪府立体育会館）宝塚ホテルに泊まる
7. 1	水		8.00大阪発、14.41徳山着、特急かもめ
7. 2	木	○	試合（下松市民体育館）
7. 3	金		8.48小郡発、13.23熊本着、
7. 4	土	○	試合14.00（熊本市立体育館）
7. 5	日		水俣観光
7. 6	月		阿蘇観光
7. 7	火		23.00 別府発（船）
7. 8	水		12.10 神戸着
7. 9	木		奈良観光
7. 10	金		奈良観光
7. 11	土		バスで名古屋へ
7. 12	日	○	観光、試合14.00（金山体育館）
7. 13	月		15.14名古屋発、19.30（特急はと）東京着、（雅叙園観光ホテル）
7. 14	火	○	試合18.00（東京体育館）
7. 15	水	○	試合15.40（東京体育館）
7. 16	木		18.00レセプション（光輪閣）
7. 17	金		羽田発



B. ルシオー



J. ボールデン



A. ボスレドン



M. ビアラ



M. レフエブル

来日フランス・チームのメンバー

役員および同行者（家族）

▽フランス協会

会　長　プチ・モンゴベール
(CH. PETIT-MONTGOBERT)

理事長　ピカール
(CH. PICARD)

▽フランスチーム（役員）

団　長　ポール・クアレス
(PAUL. QUAREZ)

〃　夫人
(MADAME・QUAREZ)

ジネット・クアレス嬢
(MA'DEMOISELLE・QUAREZ・GINETTE)

フィリップジョリベ
(PHILIPPE・JOLIVET)

アンドレ・グイットン　30歳
(MADAME・ANDRI. GUITTON)

イボン・シコ　24歳
(YVON. SICOT)

ニコック・グイットン夫人
(NICOK. GUITTON)

マグリト・ザグエル夫人
(MARGUERITE. ZAEGEL)

▽男　子

背番号

監督　13　フェルナンド・ザゲル
(FERNAND・ZAEGEL)

GK　0　ダニエル・パルティ　19歳
(DANIEL. PARTY)

〃　1　ジャン・チボー
(JEAN. THIEBAUT)

FP　2　ジェラール・ロション　24歳
(GERARD. ROCHON)

〃　3　アンリ・バンダン　26歳
(HENRI. BAUDIN)

〃　4　アライン・ベルジャー
(ALAIN・BERGER)

〃　5　ジャン・マウリス・デルジクェ
(JEAN・MAURICE・DELDIQUE)

〃　6　アンドレグイットン
(ANDRI・GUITTON)

〃　7　ミシェル・レフェブル　20歳
(MICHEL. LEFEBYRE)

〃　8　アンリ・テキサー　24歳
(HENRI. TEXIER)

〃　9　ジャン・デシャン　24歳
(JEAN. DESCHAMPS)

〃　10　ポール・コント
(PAUL・COMTE)

〃　11　ギー・プチ　21歳
(GUY. PETIT)

〃　12　ジョルジュ・ブリザール　23歳
(GERGES. BRISSARD)

―――〇―――〇―――

（女子）

背番号

監督　12　マグリト・ビアラ　45歳
(MARGUERITE. VIALA)

GK　0　ジャニーヌ・ボールデン　29歳
(JEANINE BOURDIN)

〃　1　イオランド・アントロアニー　22歳
(YOLANDE. INTROINI)

FP　2　ルネ・ベレック　25歳
(RENEE. BELLEC)

〃　3　アンネ・ボスレドン　29歳
(ANNE. BOSREDON)

〃　4　レイモンド・ウォルフ　36歳
(RAYMOND. WOLFS)

〃　5　パウリット・ウォルフ　36歳
(PAULETTE. WOLFS)

〃　6　ゲルメーヌ・リノシェ　23歳
(GERMAINE. LINOSSIER)

〃　7　クリスチアーヌ・タラミー　35歳
(CHRISTIANE. THALAMY)

〃　8　ベルナデット・ルシオー　26歳
(BERNADETTE. RUSSIAUX)

〃　9　ジャニーヌ・ピボ　24歳
(JEANINE. RIVOT)

〃　10　ジャクリン・デボー
(JACQULINE. DEVAUD)



クアレス嬢



R.ウォルフ



P.ウォルフ



C.タラミー



R.ベレック

（写真は５月25日到着分のみ）



左は３月にステラが発行した日本・ステラ・チーム親善試合のプログラムの表紙，下はステラチーム，



競技規則、審判申し合わせ事項の一部改正について

日本協会は五月十二日競技規則と審判申し合わせ事項の一部改正を決め、六月一日から実施する。

「趣旨」本年2月に一部を改正したが、その後世界ハンドボール界の情勢から日本が遅れることを恐れ、諸氏の賛成を期待して一部改正することにした。

▽競技規則の一部改正

「規則書（p27—8の5）ゴールスローまたはボールに触れたあとに、ゴールキーパーがゴールエリア外で再びボールに触れるのは、このボールが他の競技者に触れたあとでなければならない（フリースロー）」＝

「〃触れた〃を〃投げた〃と改正する」

〔注〕（イ）原義は「プレイ」になっている。

（ロ）〃投げた〃とはゴールエリア内でGKが明らかにボールを持ち、味方にパスする目的で投げた動作をいう。

（ハ）したがってシュートされたボールを防御の目的でからだではじき、エリア外のフィールドに出たボールを再び触れてもいい。

▽審判申し合わせ事項の一部改正

「審判員必携（７）シュートが行なわれたあと、攻撃側または防御側のプレーヤーがエリア内にいる場合、ボールが跳ね返ってゴールエリアからフィルドに戻りつつある場合、または戻った場合」の取り扱いについて＝シュートしエリア内にいるとき、同チームのプレーヤーがエリア内からフィールドに戻ったボールをプレーしてもよい。即ちシュート後、Aチームのプレーヤーがエリア内にいるとき、跳ね返ったボールを同じAチームの者が拾い、シュートしてはいったときは得点となる。

〔注〕（イ）従来の影響については考慮してあったが、今回は明らかに故意の妨害以外はラインクロスの反則としない。

タイトルの行くえを探る

＝64年度の新勢力展望＝

杉山　茂

　ことしはオリンピック東京大会の年である。『オリンピックからはずされることがどんなにつらいものか。われわれは死ぬ思いをしている』とは昨年暮れのJOC総会で高嶋理事長が述べた言葉だ。この悲運にもめげず、ことしのハンドボール界は二つの国際交流をはじめ、なかなか活気のあるシーズンになりそうだ。

　昨シーズンの最後を飾ってチェコの世界選手権で全日本がノルウェーを破り、宿願の1勝をあげたことは国内のプレーヤーに大きな刺激となった。オリンピック東京大会の種目からはずされていちじは悲嘆のどん底にまで落ちた球界が、26年にわたる11人制の全廃という英断に踏み切り、その年の世界選手権で前回7位のノルウェーをくだしたことは再び前途に希望の灯を見出したといっていい。国内におけるチーム数も各分野とも増加の傾向にあり、特に高校界と実業団の拡充を目ざましいものがある。

攻撃力に不安の立教

　さて昨シーズンの話題をさらったのは立大のあざやかなカムバックぶりであった。その強さはシーズン前に一応予想されたものの、全日本学生、全日本総合の2タイトルを獲得、全日本室内に準優勝するという大活躍をとげるとは思わなかった。追われる立ち場にあることしの立大は安達、中根、田村の抜けた攻撃力に不安がある。それにGK尾形が世界選手権後のフランス・ステラ・チームとの試合で右眼を負傷し、目下療養中である。江名、斎藤、高久保、松本らで昨年同様のスケールの大きい攻撃陣を編成するのはむずかしいのではなかろうか。昨年の東京選手権には新メンバー（立大A）で出場、準決勝で大崎電気（東京）に11―25で敗れているのをみても今シーズンの立大の苦しさがわかる。しかし昨年得た自信と、タイトルを守り抜こうという意欲は「無形の戦力」として見落とすわけには行かない。やはり、ことしも全日本大会の有力な優勝候補としてあげられる。

最有力の大崎電気

　立大を追うトップグループは大崎電気、芝浦工大、全日体大あたりとみるのが順当。特に全大会で〃本命〃と見られるのが大崎電気である。単独チーム同様にして世界選手権に出場し、主力10人が本場ヨーロッパの技術を学んできただけに、ことしの試合ぶりは見ものである。全日体大が昨年の全日本室内で見せた根性も伝統ある強者にふさわしいものであった。現役の充実で久しく遠ざかっていた夏の全日本タイトルをことしは奪い返す好機である。学生界では立大をはじめ東の芝浦工大、西の関学、同大のトップチームの顔ぶれは変わりばえがしない。芝浦工大は昨年は全日本学生王座を得ただけだったが、関係者にいはせると『7人制に不慣れだった』ことが惜敗の原因だという。立大に奪われた2大タイトルの奪還に燃えているのが芝浦工大である。

奮起するか関西勢

　立大、芝浦工大、日体大同様に期待が持てるのは同大、関学の関西二強である。

　しかしこの両者は関西では強豪ぶりを発揮しているものの、ヒノキ舞台での活躍はあまり期待できない。最近は技術的にも精神的にも完全に関東に追い抜かれた。昨年の学生王座でも有利な条件がそろっていたはずの同大が、一方的な経過で芝浦工大に敗れている。二強にしても関大にしてもなにかが欠けているのである。気力の充実さえあれば学生界を制することはもとより、大崎電気、全日体大などと互角の実力を発揮できるはずである。関西勢、特に関学の発奮を希望したい。

気をはく清商ク

　トップグループに次ぐ第2グループと見られるのは教大、宗形製作所(大阪)、桜丘会(愛知)、清商ク(静岡)、住友化学菊本(愛媛)、中京大（愛知）などである。長い間関東学生二部にいた名門教大が昨年夏あたりから復活のきざしを見せている。宗形製作所も2月の全日本実業団に初出場して、よいところを示したのはご存じのとおりだ。中京大、住友化学は毎年、前評判の割にはよい成績をあげていない。ことしは大きく前進してもらいたい。実業団の進出でクラブチームはシーズンごとに後退して行く。そのなかで桜丘会、清商クの東海勢がいぜん強みを見せているのは見事である。桜丘会は愛知教員クの結成でメンバーが分散してしまい、昨シーズンは低調だった。だが再建に積極的な手が打たれ、桜丘会を中心にして編成される「全愛知」は国体で大崎電気の4連勝をはばむ最有力チームになりそうだ。清商クの実力も高く評価してよい。メンバーの結束も堅く、スピードある攻守は一級品。「ことしはなにかひとつ全国タイトルを」と気をはいているだけに、各大会のダークホースとして見のがせないチーム。

　このほか今シーズンの活躍が期待されているのは東北学院大、京都ク、下関ク(山口)、氷見ク(富山)、岡野バルブ(福岡)などで、桃山学院大が復帰すれば学生界の有力チームとして進出しよう。また早慶明のカムバックを願う声が起きて久しいが、三大学とも今シーズンは充実した布陣で上位進出をねらっている。実業団球界では東西の大学出で固めたチームよりも、高校生中心のチームの方が好成績をあげているようだ。その意味で美津濃(大阪)、三菱レ(広島)、本田技研(三重)、日本鋼管(神奈川)らの成長が楽しみである。

教員は大阪、愛知有力

　昨年の国体から教員部門(男子)が新設され、教員チームには大きな励みとなっている。ことしは国体に30チームが出場するが、レベルの高い選手が多い教員界だけに好試合が予想される。実力的には昨年の全日本教職員と国体教員のダブル・クラウンに輝やいた大阪教員ク。それに全愛知教員クがことしも優勝候補としてあげられて

いる。熊本、山口、新潟、長野、岐阜、香川などがこれに続こう。自衛隊球界では年々レベルの向上が認められ、2月の全日本実業団では勝田（茨城）、体育学校（埼玉）などがかなり高い水準を示している。その育成のためにも事情が許すかぎり、学生チームなどは自衛隊チームと交流試合を行なうべきだろう。

安定した大洋デパート

昨年『君の女子の予想は当たらないね』といろいろな人から皮肉を言われた。私は全国タイトル四つの行くえを愛知紡3、熊本大洋デパート1と予想していたのである。結果は大洋2、大崎電気（東京）、レナウン東京各1だった。愛知紡の主力選手の引退による戦力低下で、混戦状態となったのがその原因であろう。ことしもこの混戦状態が続きそうである。愛知紡の復活、田村紡（三重）、レナウン大阪の成長を考えれば、むしろ昨年以上の乱戦となりかねない。ますます予想がむずかしくなりそうだ。このなかでいちばん実力が安定していると思われるのは大洋デパートである。西村に続く後進の成長でチーム力に厚みができてきた。（注＝四月中旬現在で徳永、桜木の退部、それに故障者が続出している）。

対抗と目されるのはレナウン東京だ。大崎の方が上位と見る人も多いが、試合展開力にすぐれたレナウンを私は買う。これといったスターがいるわけではない。チームプレーに徹しているだけに、実業団優勝の自信は今シーズンにも大きな影響を及ぼすと思う。大崎は実力を存分に発揮できない欠点がある。ことしも「男女優勝」にこだわると誤算続きのシーズンになりかねない。

復調なるか愛知紡

今シーズン愛知紡がカムバックするか、どうかはひとつの興味だ。〝本命〟とまではいくまい。しかしことし「常勝」という十字架を初めから背負されているわけではないので、のびのびとしている。きっかけさえつかめば、再びトップチームとして健闘すると思う。この四強の一角に割り込もうとするのが田村紡、レナウン大阪である。

結成3年目を迎え、少女チームから脱皮しつつある田村紡は調子に乗ると旋風を起こす可能性がある。レナウン大阪は結成いらいの地味な努力が、愛知紡を破った。僚友東京の優勝に刺激されて思わぬ金星をあげることもじゅうぶん考えられる。この2チームの進境いかんでは今年の一般女子界はおもしろくなる。女子の天下は実業団に完全に占められてしまっているが、最近徳山ク（山口）、寝屋川ク（大阪）、富山女高ＯＧ、明善ク（福岡）などは相変わらず名門らしい試合ぶりで、クラブ界を支えているのは賞してよい。一方、女子学生界は昨秋から関東リーグも3校（日体大、日女体大、東女体短大）となったが、全国的な発展を積極的、組織的に働きかけるべきだろう。チームが増え、試合数が増えれば実業団に次ぐ勢力にまで伸びる。高校界の下にあるような現状では情ない。

7人制二年目の男子

世界選手権での1勝を強烈な刺激としてうけとめたのは、やはり若い力――高校界であろう。

昨年韓国高校選抜との交流で1勝5敗という不振に終わったのはショックだった。ことしは全国高校終了後に三度目の日韓交流が決定しており、雪辱への意気に燃えている。また、男子は7人制統一後、二年目を迎えるわけで、どのような成長を示しているか期待を持って見守りたい。

全国高校の有力チームとして評判が高いのは桜台、中京商の愛知二強をはじめ寝屋川、三国丘（大阪）、兵庫工、明石（兵庫）、熊本市商（熊本）、明星（東京）、氷見（富山）、清水市商（静岡）など。このほか14年連続出場目ざす新居浜工（愛媛）、10年連続13回目の出場をねらう盛岡一（岩手）の両古豪、それに加納（岐阜）、金浜商（石川）、小杉（富山）、地元となる長野勢の進境も大会を色どることになりそうだ。

城北の連勝なるか

一方、高校女子も初の韓国遠征が予定され、張り切ったプレーが見られよう。

3連勝をねらう静岡城北は昨年の優勝メンバーの大半を残しており、熊本市立高の樹てた3連勝の記録にタイとするかどうか注目される。しかし大阪、東海、北関東、中国、九州など名門校の多い地区では、相変らずレベルの高い予選が行なわれている。これらの地区からの出場校は、静岡城北にとって大きなカベとなりそうである。

こうした名門校の伝統的な強さに対して、今シーズンはかなり新顔チームが登場しそうである。特に吉原（静岡）、名古屋女商（愛知）、富山北などの活躍が期待できる。

芝浦工大13回目の優勝

関東学生春季リーグ戦は4月29日から5月17日まで明大八幡山グラウンドで行なわれた。芝浦工大は第1戦で中大に10―9で敗れたが、その後順調に勝ち進んで昨秋に引き続き2連勝、通算13回目の優勝をとげた。

『一部』

①芝浦工大6勝1敗②立大、法大、教大5勝2敗⑤早大、日体大中大2勝5敗⑧明大1勝6敗

『二部』

①慶大5勝②茨城大4勝1敗③防衛大3勝2敗④順天大2勝3敗⑥東大1勝4敗⑥東京学芸大5敗

『三部』

①日大5勝②武蔵工大4勝1敗③関東学院大3勝2敗④千葉工大2勝3敗⑤東京理大1勝4敗⑥上智大5敗

『女子』

①日体大4勝②東女体大2勝2敗③日女体短大4敗

レナウン東京　宿願の初優勝

第4回全日本実業団・2月8日～10日・大阪

男子は大崎電気が4連勝

第4回全日本実業団選手権大会は2月8日から大阪市中央体育館で男子24（棄権1）女子8チームが参加して行なわれた。大会始まっていらいの多数の参加があり、各チームのレベル向上からシーズン最後を飾るにふさわしい大会となった。

「男　子」

▽一回戦

自衛隊勝田（茨城）20（10－8　10－7）15 丸紅飯田（大阪）
岡野バルブ（福岡）33（15－7　18－9）16 大阪ガス（大阪）
美津濃（大阪）16（5－10　11－5）15 新三菱重工（愛知）
宗形製作所（大阪）17（11－3　6－7）10 日野自動車（静岡）
日本鋼管（神奈川）10（4－1　6－6）7 自衛隊体育学校（埼玉）
ゼネラル物産（大阪）不戦勝 神工業（北海道）
三菱レイヨン大竹（広島）21（14－5　7－12）17 盛岡市役所（岩手）
豊橋建設（愛知）12（5－2　7－7）9 日東電気（大阪）

▽二回戦

大崎電気（東京）32（14－0　18－1）1 ゼネラル物産
自衛隊勝田 15（4－9　11－4）13 京都市役所
岡野バルブ 18（8－5　10－7）12 市ケ谷32連隊（東京）
美津濃 18（8－5　10－3）8 日本触媒（兵庫）
宗形製作所 22（11－4　11－1）5 常盤工業（岐阜）
日本鋼管 22（9－8　13－8）16 本田技研（三重）
三菱レイヨン大竹 23（9－3　14－5）8 安田生命（東京）
住友化学菊本（愛媛）22（9－2　13－6）8 豊橋建設

○…京都市役所、本田技研が敗れる波乱があった。京都市役所は前半、能波、中村、福井らが確実に得点してリードした。しかし体力にまさる自衛隊勝田は後半出足のよいカットから反撃に転じ、福井のタイミングのよいシュートで12分には10－10とタイにし、このあと一気に逆転して京都の追撃を振り切った。また日本鋼管クも初登場とは思えぬ試合運びのうまさで本田技研を破った。住友化学（前回2位）対豊橋（3位）は好試合が期待されたが、前半15分6－2と開いて以後は住友のペースに終わった。東西の大学出で固めた安田生命も攻守に鋭さがなく三菱レに完敗。（杉山）

▽準々決勝

大崎電気 38（23－4　15－5）9 自衛隊勝田

丸紅、京都市役所を破った勝田のダークホースぶりに期待されたが、前半10分で8－1と離されてしまった。しかし勝田のこの大会での活躍は印象に残り、自衛隊球界の成長を示すものであった。

（岡井主審）

岡野バルブ 26（12－2　14－4）6 美津濃

美津濃は遅攻、岡野は速攻と対照的だったが、美津濃の遅攻はドリブルにたよりすぎ岡野のディフェンスに完全につぶされた。これに対して岡野は矢島を軸に多彩な攻撃をみせて文句のない勝利だった。（中出主審）

宗形製作所 19（10－5　9－1）6 日本鋼管ク

ともに初出場。芝工大OBで固めた宗形はさすがに試合運びがうまく、鋼管クを圧倒した。宗形の攻撃は中央、サイドと変化があり、しかも久保がすばらしい当たりをみせて10点をあげ、余裕ある試合ぶりだった。鋼管は前半24分まで5－8と食い下がったが、後半はずっ、17分本田が1点を報いたにすぎなかった。体、技ともにすぐれた宗形の勝利は順当。（杉山）

住友化学菊本 18（8－7　10－5）12 三菱レイヨン大竹

勝負のヤマは、後半10分からの「5分間」にあった。それまでは一進一退、互角の試合だった。住友は後半10分加藤のゲットで11－9と2点リード。11分、13分北山、14分加藤、15分伊藤とたたみかけて15－9とし、三菱レを大きく突き放した。三菱レ守備陣がこの5分間無策だったのは惜しい。見ごたえがあり。実業団チームの充実を示す試合だった。（杉山）

▽準決勝

大崎電気 22（12－1　10－3）4 岡野バルブ

1分大崎竹野が先取点、そして1分30秒岡野の中原がゲット。スタンドからわっと拍手が湧いた。しかし、岡野にとってこの得点が前半唯一のものとなった。以後は大崎のワンサイド。岡野は後半開始直後連続2点をあげるなど新鋭らしい試合ぶりだったが、力の差がありすぎた。（杉山）

宗形製作所 14（6－2　8－7）9 住友化学菊本

最初から両チームとも激しい闘志をみせた。1点を先行された宗形は10分ごろからようやく調子を出し、越智、久保を交互に走らせ、この二人の突進力で全得点（前半）をかせいだ。後半の住友は宗形のパスミスをひっかけて4分には6－7と迫まったが、逆転するに至らず、10分以後は再び宗形のペースとなった。住友としては宗形の久保と越智に対するマークが甘くまた攻めてはむだなローリングが多く、決め手となる得点源がなかったのが敗因。（光島主審）

▽決　勝

大崎電気 27（9－4　18－6）10 宗形製作所

○…宗形の主力は芝工大OB。前半18分宗形が3－1から久保のゲットで3－2とした。しかし大崎は徐々に力を出して、6－2、8－3、9－4と時間の経過とともに点差が開いてしまった。前半で

得	【宗形】	
2	辺	川
1	川	平
0	見	鷹
2	智	越
3	保	久
2	村	中
0	川	荒
0	見	塩
0	沢	栗
0	GK	谷
10	（1）7MT（4）	27
得	【大崎】	
8	上	井
8	野	竹
3	田	金
1	藤	原 宮
5	村	北
0	口	田
0	橋	高
1	宏	原 宮
1	原	餅
0	本 GK	福

こうなっては、後半を持たずに『勝負あった』というところ。竹野、井上、北村らがマイボールのたびに突き刺さるようなシュートを放ってダブルスコアをはるかに上回る大差となって終わった。後半宗形もシャープなシュートや、久保がバックハンドシュートを決め、GK谷もファインプレーを発揮して応援団を喜ばせた。（杉山）

「女　子」

▽一回戦

大洋デパート（熊本）16（8—2, 8—2）4 東京重機（神奈川）

大洋は相変わらず西村、徳永、久連松のトリオが確実に得点。斎藤一人の重機に乗ずるすきを与えなかった。（杉山）

レナウン東京 9（4—3, 5—1）4 田村紡（三重）

第一日の好カード。両チームとも立ち上がりから積極的に攻めた。しかしこれといった決め手がなく、試合のペースを握ることができなかった。後半開始直後に田村紡は川口のシュートで4—4、レナウンはこのあと竹本が7メートルスローをものにし再びリードした。このリードに気をよくしたレナウンは10分以後3点を連取、安全圏にはいって、そのまま逃げ切った。田村紡は、簡単なシュートをラインクロスで失敗するなど勝機を自らのがした感じ。特に後半19分間無得点だったのは不出来だった。また7メートルスローを二回も失敗したのもまずい。（中出主審）

レナウン大阪 8（3—2, 5—3）5 愛知紡（愛知）

レナウンはポストプレーから菊田、東がうまく得点し、愛知紡を破る金星をあげた。愛知紡は前半1—2のあとの7メートルスローを落とし、守っては後半開始直後に、連続2点をとられるなどよいところがなかった。（小西主審）

大崎電気（東京）22（12—1, 10—2）3 揖斐川電気（岐阜）

大垣南高のOGを主力に今夏の全日本、来年の国体（いずれも岐阜県高山市）を目ざして結成された揖斐電に注目されたが、大崎の鈴木を中心とした速攻に完敗した。個人のシュート力にたよるだけでチームプレーが見られなかった。（杉山）

▽準決勝

レナウン東京 9（4—5, 5—1）6 大洋デパート

大洋は立ち上がり2—0と順調なすべり出しだったが、その後得点できず、14分には2—3とされた。しかし前半15分から中村、千原、徳永が好ゲットして1点の差でやっとリードした。昨年十二月の全日本室内はレナウンがリードして、後半大洋にひっくり返された。この試合も後半は追う者が有利になった。後半開始直後レナウンは強引な攻撃であっさり5—5とタイ。8分30秒には太田のあざやかな切り込みで6—5とリードした。大洋も11分西村の初得点で6—6としたものの、試合はだれが見てもレナウンのペース。13分斎藤、さらに14分には竹本が7メートルスローを決めて8—6。17分には太田がダメを押して大洋を押えた。前半の接戦とは打って変わり、後半はレナウンの一方的な試合となった。レナウンのまとまりを再認識させられる一戦だった。（杉山）

大崎電気 13（9—2, 4—7）9 レナウン大阪

愛知紡を破って意気揚がるレナウン（大阪）であったが、大崎はスタートから好調。縦へのショートパス攻法があざやかに決まり、レナウンディフェンスはその体勢が整わぬうちにゴールを割られてしまった。レナウンはセットオフェンスに研究のあとが見られたが、「型」にこだわりすぎて柔軟性がなく、しかも凡ミスを繰り返して大崎に逆襲の糸口を与えた。後半レナウンは大崎がシュートミスで苦しむスキをサイドから攻めて追い込んだものの、前半10分7—2での差が最後までひびいた。（岡本主審）

▽決　勝

レナウン東京 11（5—4, 5—6 … 1—0, 0—0）10 大崎電気

得	【レナ】	
1	辺	渡
2	田	太
3	岡	風
2	本	竹
3	林	
0	藤	斎
0	上	川
0	沼	柿 GK
11	（4）7MT（1）	10
得	【大崎】	
0	村	田
2	川	黒
0	女	乙 早
3	木	鈴
1	井	宇
4	井	永
0	津	深
0	石	白
0	谷	古

○…女子の全国大会で東京同士が顔を合わせたのは、球史始まっていらいのこと。先取点は9分になってやっとレナウンの風岡がFTからあげた。11分こんどは大崎の永井がFTからクリーンシュートして1—1。このあと試合は前半14分レナウンが4—2とした「1分間」以外、たえず1点差であった。しかしわずかにレナウンが押し気味の試合であった。それは絶えずレナウンが先手を取っていたことと、大崎のパスワークが極端に乱れ、しばしばラインを割る悪投さえ生むという不調によるものだった。その大崎が後半6分にGK古谷のうまいボール出しから宇井が単身ドリブルで持ち込んで初めて7—6とリードした。大崎はここで主導権を握るべく、慎重な攻防を見せるべきではなかったろうか。にもかかわらずあっさり風岡に同点のゲットを許し、攻めてはゴール前でボールをいたずらに回すだけという悪いクセを出してしまった。しかし押されながらも勝運はあくまで大崎に味方していたようで、レナウンは後半7メートルスローを二回も失敗した。しかもそのうちの一回は大崎に10—9とリードされたあとだっただけに、これを落としたレナウン勢は敗色濃いものがあった。ところが粘るレナウンはタイムアップ直前にFTから風岡が起死回生のロングシュートを決めて延長に持ち込んだ。延長前半1分、竹本が7メートルスローを決め、この1点が決勝点となった。レナウン東京の初優勝は球界に新風を吹き込み、シーズン最後を飾るにふさわしい幕切れであった。（杉山）

町野正光君死去

丸紅飯田（大阪）の町野正光君（20歳、熊本商高出）は2月14日朝ガス中毒で死去した。前夜残業したあと同僚とガスストーブをつけたまま就寝、ガス管がはずれたものらしい。同君は数日前の全日本実業団選手権で大いに活躍した。

本・誌・恒・例　昭和38年度10大ニュース　本・誌・恒・例

世界選手権に出場した全日本が帰国して昨シーズンのすべての行事が終わった。そこで本誌恒例の「昭和38年度の10大ニュース」を選んでみた。

①11人制全廃、7人制の採用（4月）

11人制の全廃は一昨年あたりからすでに「時間の問題」といわれていた。しかし、これまでの球界は11人制によって築かれ育ってきただけに反響が大きかった。

②世界選手権てノルウェーから宿願の初勝利(39年3月)

詳細は別面特集のとおりだが、3月6日パルドビッチ（チェコ）で行なわれた7人制男子第5回世界選手権第一日で日本がノルウェーを18—14で破った。世界選手権に参加すること四度び。この間連敗していただけにこの〃1勝の意義〃は大きい。

③立大、全日本学生、全日本総合の2大タイトル獲得（7月、8月）

長い間、上位戦線から遠ざかっていた立教大があざやかなカムバックを見せた。まず5月の関東学生リーグで昭和26年秋季いらい23シーズン（12年）ぶりに優勝、第6回全日本学生、第15回全日本総合でも堂々と優勝した。芝浦工大、全日体大、大崎電気などにタイトルが片寄っていただけに、立大の健闘は新鮮な話題であった。

④女子実業団の拡充と大洋デパートの2大タイトル獲得（8月、10月）

上昇の一途をたどる女子実業団球界は東京重機（神奈川）、揖斐川電工、近江絹糸（以上岐阜）などがチームを結成。しかも常勝愛知紡が主力選手引退から戦力が低下したため混戦状態となった。そのなかで大洋デパート（熊本）が第15回全日本総合、第18回国体に優勝して安定した力を見せた。また、第10回全日本室内は大崎電気（東京）、第4回全日本実業団はレナウン東京がそれぞれ初優勝したが、女子実業団はシーズンごとに激しさを増している。

⑤日韓高校戦で日本1勝5敗の不振（12月）

まさかと思ったこの国際試合で日本は第1戦（明星高）に勝利を飾っただけ。以後5連敗という不振に終わったのはショックだった。敗因はいろいろあるが、韓国の基礎技術向上は万人が認めているところである。韓国ならいつでも勝てるという思いすごしを改めなければならない。

⑥第18回国体で徳山高が初の男女優勝（10月）

地元の利があったとはいえ、徳山高のこの活躍は見事。当分この記録は破られそうもない。同校はこの快挙で、今シーズンの日本スポーツ賞ハンドボール部門賞（読売新聞社制定）を受けた。

⑦地方協会々長に、実業団チーム社長が続々登場

まもなく30周年を迎えようとしている協会が、将来発展するにはどうしても地方協会など下部組織が拡充されなければならない。その機に愛知協会長に小杉仁造氏（愛知紡社長）が就任したのを始め、東京協会長に渡辺和美氏（大崎電気社長）、福岡協会長に岡野正実氏（岡野バルブ専務）、三重協会長に田村正衛氏（田村紡社長・三重県体育協会長）がそれぞれ就任したのは朗報である。ハンドボールを愛し、ハンドボールを知る会長の登場はこんごますます増えるだろうし、また増えてほしいものである。

⑧芝浦工大、3年連続全日本学生王座獲得（11月）

春の関東学生、そして夏の全日本学生で立大に敗れたが、秋のリーグには再びタイトルを奪還。そして王座を守ったのは、やはり芝工大の地力を示すものである。王座獲得はこれで六度目。関学の八回にあと二回と迫まった。

⑨韓国学生選抜が来日（6月）

35年のルーマニアいらい久しぶりに外国チームとして韓国学生選抜チームが来日。全国で8試合（韓国3勝4敗1分）を行なった。

韓国からチームが来日したのは初めてであり、第1戦（東海学生・名古屋）は国内で初の室内（7人制）国際試合だった。

⑩関西学生春季リーグのトラブル。桃山大除名、関学出場停止騒ぎとなる（5月）

関西学生春季リーグ第二日の関大対関学戦で関学が判定問題から試合放棄した。これに端を発し、桃山学院大が関学との対戦を拒否したため、騒ぎが一段と大きくなった（本誌第14号参照）。事情はともあれ、学生界でこのようなことが起きたのは遺憾であり、今シーズンの汚点となったのは残念である。

（次点）全国高校女子で静岡城北高2連勝。

お願い

39年度の10大ニュースは関係者、読者の方々にアンケートを発送して集計したいと思っています。そのさいは協会から用紙を発送しますのでご協力ください。くわしいことは次号でお知らせします。

連載第8回

ハンドボール球史

—戦後の関東学生リーグ戦—

今回も前号に続いて、関東学生リーグのシーズン別成績を掲載する。なお前号で「昭和16年に東京でオリンピック大会が……」とあるのは昭和15年の誤りでしたので訂正します。

関東学生リーグ戦（後編）2

▼昭和22年春季＝立教大新加盟

早大10—1法大
日体12—0中大
明大2—0日体
慶大7—2立大
法大9—0中大
早大14—2慶大
文理大9—0中大
法大6—2立大
早大6—3明大
文理大6—1慶大
立大7—3中大
法大3—1日体
明大4—3慶大
早大8—4文理大
日体3—1立大
明大3—2文理大
明大6—3中大
早大15—1立大
明大7—3立大
慶大7—2中大
文理大5—4法大
早大25—0中大
法大6—5慶大
日体3—2文理大
早大12—2日体
法大7—5明大
文理大11—0立大
日体3—0慶大

【順位】①早大7戦全勝（2シーズンぶり・4回目）②明大、法大5勝2敗 ④日体、文理大4勝3敗 ⑥慶大2勝5敗 ⑦立大1勝6敗 ⑧中大7戦7敗

▽同女子＝東京第一師範新加盟

日体4—0埼玉師範
音体3—0第一師範
日体7—1第一師範
日体2—1音体
埼玉師範3—0第一師範
音体1—0埼玉師範

【順位】①日体女子部3戦全勝（2連勝・2回目）②音体2勝1敗 ③埼玉師範女子部1勝2敗 ④東京第一師範女子部3戦3敗

▼昭和22年秋季＝水戸高専、東京第一師範新加盟、全10校となり初の一、二部制採用

文理大3—2日体
明大6—4法大
早大9—3日体
文理大4—3明大
文理大5—3法大
明大9—4日体
早大11—4文理大
早大8—5明大
日体6—2法大
早大11—0法大

【一部順位】①早大4戦全勝（2連勝・5回目）②文理大3勝1敗 ③明大2勝2敗 ④日体1勝3敗 ⑤法大4戦4敗

【二部順位】①慶大4戦全勝（初優勝）②水戸高専 ③中大 ④立大 ⑤東京第一師範

▽入れ替え戦

慶大　記録不明　法大

▽**女子**

埼玉師範3—0音体
日体　棄権　第一師範
音体1—0第一師範
埼玉師範2—0日体
日体3—0音体
埼玉師範　棄権　第一師範

【順位】①埼玉師範女子部3戦全勝（初優勝）②日体女子部2勝1敗 ③音体1勝2敗 ④東京第一師範女子部3戦3敗

▼昭和23年春季＝東京第一師範（二部）不参加

文理大8—4明大
早大17—3慶大
日体7—2慶大
早大7—3日体
明大9—2慶大
早大8—4文理大
文理大7—0慶大
早大7—4明大
明大4—3日体
文理大3—0日体

【一部順位】①早大4戦全勝（3連勝・6回目）②文理大3勝1敗 ③明大2勝2敗 ④日体1勝3敗 ⑤慶大4戦4敗

【二部順位】①立大3戦全勝（初優勝）②法大2勝1敗 ③中大1勝2敗 ④水戸高専3戦3敗

▽入れ替え戦

立大5—4慶大

【女子順位】①東京第一師範女子部・日体女子部2勝1敗（第一師範初優勝、日体2シーズンぶり3回目）③音体1勝1敗1分 ④埼玉師範女子部2敗1分

▼昭和23年秋季＝新たに予科リーグを新設し日体は転属。水戸高専（前季二部）は不参加となり、再び7校による一部制。

中大4—2法大
文理大17—2慶大
早大8—4明大
明大12—1中大
早大11—1立大
文理大4—2法大
早大9—2法大
文理大18—1中大
明大8—2立大
慶大7—2中大
早大不戦勝中大
法大7—6明大
文理大5—0立大
早大11—1慶大
立大7—3中大
明大10—1慶大
法大4—3慶大
文理大7—5明大
法大6—4立大
立大5—0慶大
文理大7—6早大

【一部順位】① 文理大6戦全勝（5シーズンぶり・3回目）②早大5勝1敗 ③明大、法大3勝3敗 ⑤立大2勝4敗 ⑥慶大、中大1勝5敗

【女子順位】①日体女子部2戦全勝（2連勝・4回目）②東京第一師範女子部1勝1敗 ③埼玉師範女子部2戦2敗。。なお音体は今季から不参加。

【第一回予科リーグ順位】①日体6勝1敗（初優勝）②早大予科5勝1敗1分 ③法大予科4勝1敗2分 ④明法予科4勝2敗1分 ⑤ 文理大予科4勝3敗 ⑥慶大予科・中大予科・立大予科1勝6敗

地方球界の歩み

北から……南から……④

愛知県(3)

前号でも述べたとおり、愛知県チームによる初の全国優勝は25年2月地元一宮で開いた第1回全日本総合女子で愛知クによってなしとげられた。続いて26年1月の第4回東西対抗高校男子で一宮高が名門天王寺高（大阪）を破ってその二番手となった。しかし、この二つのタイトル獲得をもってしても、全国最強地区としての名声はいぜん大阪、東京、福岡、岡山あるいは北関東諸県に及ばぬものがあった。名実ともに「ハンドボール愛知」の名を確固たるものにしたのは、26年6月の第2回全国高校男子に初出場した桜台高が見事優勝を飾り、さらに同年の第6回国体高校男子、第5回東西対抗高校男子にも優勝、26年度の高校男子のトリプルクラウンを握り、55戦全勝の快記録を打ち樹てたことだ。さらに27年には国体高校で男子桜台高（二連勝）、女子稲沢高がそれぞれ優勝、28年には、この両校が全国高校、国体高校の両大会優勝という快挙をやってのけ、全国最強地区の名をゆるぎないものとした。桜台高はこのあと32年まで5年間にわたって全国高校のタイトルを保持し、30年からの3年間は国体にも優勝して連続ダブル・クラウンの偉業をとげたのである。

この蔭にはその基礎を築いた宇津野年一氏、26年以後現在まで監督の稲石三二氏のすぐれた指導力を見のがすわけにはいかない。

こうした高校界の躍進と同時に一般球界も優秀チームがシーズンごとに生れ、30年の国体一般女子で稲沢クが優勝、29年の第6回全日本総合でデビューした桜丘会も31年の第11回国体一般男子で優勝。全日本のトップチームとしての〃地位〃を固め、以後の全国大会では常にビッグ・フォアに名を連ねる強豪となった。桜台、稲沢、桜丘会、稲沢クなどは全国諸チームから打倒の目標とされる一方、県内チームもこぞってこの四者から勝利をあげようと努力した。愛知県を制することは全国を制する力を有していることにひとしかったからだ。この県内の激烈な争いはプレーヤーのレベル向上に大いに役立ち、32年の国体一般女子では全愛知を編成して優勝を飾るほどの厚い選手層を築くところとなった。

また当時の県内の高レベルを物語る代表的な例は、30、31年の2年間、全国高校への「出場権」を稲沢高からどうしても奪えなかった半田高が全日本総合に出場。一般、学生などの間にまじって30年準優勝、31年には優勝という記録を残したことであろう。

この優勝で県の高校女子界の座は稲沢高から半田高に移った。31年の優勝メンバーの主力は32年愛知紡に入社、その年の第9回全日本総合でデビューしてあっさり優勝、いわゆる「愛知紡時代」のふた明けとなるわけである。

愛知紡についてはその活躍が近年なので省略したい。しかし32年から全日本総合6連勝、国体一般女子2連勝、全日本総合室内2連勝、全日本実業団3連勝と37年までの6年間に13の全日本タイトルを獲得、特に31年には「全日本4タイトル独占」という史上初の大記録をつくり、世界選手権（37年6月）に6人を送り込んだ。

これまでの女子界は現在のように実業団が少なく、実力差が開いていただけにタイトル独占も比較的容易だった。それにしても愛知紡のように心・技・体のそろった大チームが今後出現するかどうか。

愛知紡誕生の母体となり、32年以後はその妹格となった半田高はその後33年1月地元名古屋で開かれた第4回全日本総合室内に優勝。35年の全国高校は準優勝に終わったが、その年の国体では見事優勝。そして36年にはついに全国高校で優勝して28年いらい8年ぶりに〃女子の優勝〃を愛知に持ち帰った。なお、半田高と愛知紡とを栄光の道に導いたのは林藤吉氏であり、同氏の忍耐強い指導力も県球史上特筆されるべきものである。

一方男子は31年ごろから中京商の進出が目だつようになった。31年1月の第4回全日本総合室内で初登場、32年に待望の全国高校に初出場した。しかも決勝で桜台高と優勝を争うさっそうたるデビューで、以後は桜台高とともに連続出場。34年には3年目にして堂々と優勝をとげる進出ぶりであった。そして35年、36年は2年連続して桜台高と優勝戦で顔を合わせて連破。35年には国体高校男

子にも快勝してダブル・クラウンとなり、中京商時代となった。この中京商の指導は桜台高を手がけた宇津野年一氏が中心となった。同氏は宿敵としてかみ合う両校の育ての親という皮肉なめぐり合わせになった。この中京商の卒業生によって34年中京大が誕生、東海学生リーグに加盟すると現在まで実に5年間不敗の無敵ぶり。学生界の「惑星」として36年の第4回全日本学生では第4位となり、虎視たんたんと学生王座をねらっている。

いささか順序が逆になるが、こうした県球史の花々しい戦果がいちどに咲いたのが35年である。このシーズンはまず6月に来日したルーマニアと全愛知が瑞穂競技場で対戦。23—15で敗れたが、後半はルーマニアを圧倒する速攻をみせて10—7とリードする善戦ぶりだった。この善戦で県内の意気が揚がったが、夏の第12回全日本総合女子で愛知紡が4年連続優勝、男子で桜丘会も4位となった。さらに第11回全国高校で中京商が2年連続優勝、桜台高と半田高が準優勝した。10月の第15回国体（熊本）では、4部門完全優勝（桜丘会、愛知紡、中京商、半田高）という大記録を樹立した。シーズン最後の第7回全日本総合室内では愛知紡が3位を獲得。このシーズンだけで全国タイトル6、準優勝2、3—4位各1というすばらしい成績をおさめた。栄光に包まれた球史のなかでもこの年の花やかさは最高である。

愛知県のチームがまだ優勝していないのは17の優勝のうち、学生界の2大タイトルをはじめ全日本実業団男子などわずか7つを残すだけ。これらのタイトルも中京大、全愛知教員ク、新三菱重工などの新しい力によって近い将来必ず獲得するだろう。中学球界がシーズンごとに拡充されているのも、若い指導者層に往年の一流選手がそろっているからだ。名門、古豪、新進入り乱れてしのぎをけずる愛知球界は、いつまでも「全国最強地区」の名を誇ることであろう。（了）

三重県 (1)

三重県協会の設立は25年4月。設立までには関係者が2年に近い努力と情熱を傾け、ようやく発足したものである。協会設立へのきっかけは23年に服部英郎氏がこの競技に着眼して普及に乗り出した。その年の8月本部から的場益雄氏の来県で講習会が行なわれたことである。この講習会とその直後の競技会には二、三の高校チームが参加しただけだったが、24年春には組織的な部活動による高校チームが少数ながら誕生した。引き続いて服部氏、それに高田高教員で日体大の若手OBの日沖修氏が既成チームの強化と、県下一円への普及に努めた。また日体大をはじめ桜台高、瑞陵高など愛知県から優秀校を招いたのも、初動期の県球界のためには有意義であった。

県外試合への初参加は24年の第1回東海選手権（兼国体予選）、この大会の県予選に津市以北、ことに四日市市付近の高校体育教官が集まって参加したことが協会設立の直接の動機となった。当時から現在まで県球界が津市近在と四日市市周辺で盛大なのは、この最初の大会に集まった指導者層の影響であろう。この東海選手権参加を機に県協会設立が積極的に進み、再三にわたる準備会のあと、初代会長に森本高男氏（県教育委員）、初代理事長に藤田善祐氏、高体連部長に服部氏、理事に日沖、諸岡和夫、松井秀雄、佐野由子の各氏が決まり、25年4月1日に発足した。このあと会長は田中一郎、今井正、服部阿津二氏と変わり、現在の会長は田村正衛氏が五代目。理事長も諸岡、金沢淑郎氏（現職）と変わった。諸岡氏は26年から12年間にわたって理事長をつとめた。また創立当初の理事であり、それ以後も女子チームの育成に熱意を注がれた佐野氏の功績も大きい。協会活動の発展とともに競技面もシーズンごとに成長した。各チームの対抗意識もさかんで、特に25年6月の全国高校予選決勝で四日市工高と四日市高が顔を合わせ、両校生徒が総出で応援合戦を演じ、いまでも語り草のひとつにされるほどの激戦だった。これら競技面での詳細は次号にする。（つづく）

（注＝福井県の巻は次号に掲載します）

× × ×

協会告知板

全日本室内は16チームで

日本協会は4月21日の緊急常務理事会で全日本選手権の出場チーム。試合方法について次のような原案を作成した。

「全日本総合選手権大会」

男子は32チームとする。

(A) 昨年度上位チーム 4
(B) 学連代表チーム 12
(C) ブロック代表チーム 12
(D) 地元代表チーム 3
(E) 協会推薦チーム 1

女子は制限しない。

「全日本室内総合選手権大会」

男女とも16チームを推薦、選出する。試合方法はトーナメントで4チームを選びこの4チームでリーグ戦を行なう。16チームの選出方法などについての詳細は、検討したうえ決定する。

地方だより

大阪教員ク、石川で連勝

◇ことしの国体教員、全日本教職員で優勝候補一番手にあげられている大阪教員クは1月23日金沢に遠征、地元チームと対戦、3連勝して貫録を示した。

大阪教員ク 32—8 石川教員ク
大阪教員ク 38—11 全石川
大阪教員ク 43—10 全金沢高校選抜

強化に熱入れる岐阜

◇ことしの第16回全日本総合、来年の第20回国体開催を控えた岐阜県協会は、地元チームの強化をはかって積極的な動きをみせている。このほど第一次国体候補選手を決定した。候補の中には教員に羽上田、森川（中京大出）、豊島、上妻（教大出）らが含まれており一般男子は常盤工業、女子は揖斐川電工の実業団が中心となっている。

本田技研が優勝

◇第8回三重県選手権（男子）は1月19日津女高で行なわれ、本田技研が優勝した。

▽準決勝
本田技研 23—11 四日市工ク
鵜の森ク 20—16 日本合成

▽決勝
本田技研 21（11—6、10—8）14 鵜の森ク

氷見ク、いぜん強し

◇第3回富山県室内選手権は2月8日、9日の両日富山市体育館で行なわれた。一般男子は氷見クが3連勝、女子では県立富山女高OGが不戦勝で3度目の優勝。

▽一般男子準決勝
氷見ク 31—10 富山大
全富山教員 26—19 北陸日野自動車

▽決勝
氷見ク 29（13—10、16—9）19 全富山教員

▽高校男子決勝
小杉 12（6—5、6—5）11 氷見

▽高校女子決勝
高岡女 6（3—2、3—3）5 富山北

小杉、高岡女はともに初優勝。

名女商、半田を破る

◇愛知県高校室内選手権最終日は1月26日金山体育館で行なわれ、男子は中京商が桜台を破って優勝、女子は新進名女商が半田高を大差で破った。

▽男子準決勝
中京商 19—9 愛知工
桜台 17—11 時修館

▽同決勝
中京商 15（8—6、7—5）11 桜台

▽女子準決勝
名女商 16—3 安城
半田 15—1 愛知商

▽同決勝
名女商 13（7—2、6—4）6 半田

大阪実業団 宗形が初優勝

◇かねてから準備を進めていた大阪実業団リーグは6チームが参加して1月14日大阪府立体育館で開幕。その結果、芝浦工大出で固めた宗形製作所が初優勝した。

丸紅飯田 14—13 大阪ガス
宗形製作 17—3 日東電気
美津濃 16—10 大阪ガス
美津濃 12—9 丸紅飯田
宗形製作 22—8 大阪ガス
丸紅飯田 21—1 ゼネラル物産
宗形製作 16—5 美津濃
大阪ガス 16—9 ゼネラル物産
宗形製作 棄権 ゼネラル物産
丸紅飯田 11—6 日東電気
美津濃 12—12 ゼネラル物産
大阪ガス 15—10 日東電気
日東電気 19—12 ゼネラル物産
宗形製作 16—4 丸紅飯田
美津濃 8—7 日東電気

【順位】①宗形製作5戦全勝②美津濃3勝1敗1分③丸紅飯田3勝2敗④大阪ガス2勝3敗⑤日東電気1勝4敗⑥ゼネラル物産1分4敗

◆国体関東予選兼関東選手権大会

（5月2〜4日、浦和）

「一般男子」

▽一回戦
大崎電気埼玉 41—13 塩山クラブ（山梨）
桐生クラブ（群馬）19—18 原子力研究所（茨城）
足利球友会（栃木）30—7 佐原クラブ（千葉）
千代田印刷（東京）15—10 全神奈川

▽準決勝
大崎電気埼玉 30—10 桐生クラブ
足利球友会 17—13 千代田印刷機

▽決勝
大崎電気埼玉 25（10—1、15—5）足利球友会

「一般女子」

▽一回戦
大崎電気埼玉（埼玉）25—5 全群馬（群馬）
梨窓クラブ（山梨）11—2 足利女高OG（栃木）
東京重機（神奈川）43—3 佐原女子クラブ（千葉）
レナウン工業（東京）10—9 ロンド工業（茨城）

▽準決勝
大崎電気埼玉 19—4 梨窓クラブ
レナウン工業 11—2 東京重機

▽決勝
大崎電気埼玉 7（1—3、6—3）6 レナウン工業

「高校男子」

▽一回戦
明星（東京）16—13 富岡（群馬）
塩山商（山梨）19—15 水戸工（茨城）
関東学院（神奈川）17—15 浦和市立（埼玉）
足利（栃木）23—3 佐原（千葉）

▽準決勝
明星 23—12 塩山商
関東学院 16—7 足利

▽決勝
明星 21（13—4、8—7）11 関東学院

「高校女子」

▽一回戦
前橋市立（群馬）15—6 日川（山梨）
桜水商（東京）16—5 川崎市立（神奈川）
水海道二（茨城）20—6 佐原女（千葉）
栃木女（栃木）12—3 熊谷商工（埼玉）

▽準決勝
桜水商 10—7 前橋市立
水海道二 8—8 栃木女（抽選）

▽決勝
水海道二 16（6—2、10—3）5 桜水商

「教員」

（A組）①桜友会（東京）3勝②全茨城教員（茨城）2勝1敗③山梨教員（山梨）1勝2敗④埼玉教員クラブ3敗（B組）①全神奈川教員団（神奈川）3勝②群馬教員（群馬）2勝1敗③栃木教員クラブ（栃木）1勝2敗④千葉クラブ（千葉）3敗

▽関東選手権教員決勝
桜友会 18（10—10、8—7）17 全神奈川

北信越代表も

◇国体北信越予選は4月25、26日福井市で行なわれ、次の各チームが代表に決まった。

▽一般男子 氷見ク（富山）▽一般女子 富山女高OGク▽高校男子 上田高（長野）▽高校女子 有磯高（富山）▽教員 全長野

有磯、県富女を破る

◇富山県高校選手権大会（4月18日—20日、小杉高）

▽男子準決勝
氷見 19—11 高岡
小杉 24—17 富山商

▽同決勝
氷見 17（8—5、9—4）9 小杉

▽女子準決勝
有磯 8—5 高岡女子
県富山女 25—1 藤園

▽同決勝
有磯 6（2—2、4—2）4 県富山女

加納高が男女に優勝

◇岐阜県春季選手権大会（4月11、21日、岐阜市加納高）

▽高校男子準決勝
岐阜商 19—12 岐阜西
加納 15—5 大垣農

▽同決勝
加納 12—8 岐阜商

▽高校女子準決勝
大垣南 15—7 鷲谷
加納 17—4 高山

▽同決勝
加納 14—6 大垣南

▽一般女子決勝
揖斐川電工 14（4—1、10—0）1 近江絹糸

なお一般男子は常盤工業が優勝（不戦）した。

おわび 前号当欄で第15号に掲載済の「第15回東海選手権を編集の手違い」から再び掲載してしまいました。

東京都協会だより

渡辺会長留任

39年度新役員決まる

東京都協会は4月4日大崎電気工業株式会社会議室で臨時理事会を開き、渡辺会長から39年度の新役員を次のように指名した。

会　長　渡辺和美（再任）
（大崎電気工業社長）
副会長　鈴木達雄（再任）
（レナウン工業社長）
山岡憲一（新任）
（東京重機工業社長）
理事長　外山準二（新任）
（日本通信建設）
副理事長　山岡二郎（新任）
（戸塚一中校長）
吉田正次郎（新任）
（関東学連理事長）
理　事　鶯尾武治（再任）
（共同通信社）
安藤重明（再任）
（都立城南高）
安藤純光（再任）
（法大体育学研究室）
中沢重夫（再任）
（芝浦工大）
岡村昭二（再任）
（都立玉川高）
佐野和夫（再任）
（都立神代高）
宮田豊太郎（再任）
（都立北園高校長）
松田利秋（再任）
（荏原一中）

◎第一回理事会

第一回理事会は4月13日大崎電気会議室で開き、次のことを決めた。

1、新理事の担当委員会
「総務(会計)」　安藤重明
「競技」　安藤純光
「指導・普及」　佐野和夫
「渉外」　中沢重夫
「審判」　岡村昭二

各担当理事は各担当委員を5人ないし10人を選考し、合わせて39年度予算を作成して4月24日または5月11日の理事会までに提出する。また各委員で委員会をつくり、毎月一回かならず大崎電気で会議を開く。この委員会には正副会長から1人、正副理事長から1人かならず出席することを確認した。

2、学連などとの協議
都協会は加盟団体との密接な連絡を強くするため、4月17日関東学連、東京高体連、東京中体連の幹部役員と協議した。この会議で渡辺会長から39年度都協会の大会運営、日程、予算その他について懇談した。

◎日本協会へ申し入れ

渡辺会長は4月15日、日本協会評議員の資格で次のことを申し入れた。これは1月の全国評議員会の決定事項を、3月31日までに日本協会から評議員会に報告すべきものがまだ届いていないために申し入れたもの。

1、全日本総合選手権大会の協会学連推薦チーム決定の方式の件
2、これに伴う棄権、その他の罰則規定の問題。
3、関西学連の紛争問題。

◎第二回理事会

第二回理事会は4月24日大崎電気工業株式会社会議室で開き、次のことを決めた。

1、中体連に5万円、高体連に10万円の補助を考えているが、もし補助したときは使途、決算について都協会の監査を受ける。
2、日仏親善東京大会は東京都協会が主管する。出場するチームは、芝浦工大、千代田印刷機製造KK、レナウン工業、大崎電気を考えている。
3、日本フランス親善試合の担当責任者を決めた。
「入場券」　外山、安藤（重）
「記念品」　渡辺、外山
「看　板」　山岡（二）
「プログラム」　鶯尾
4、各委員会のメンバー次のとおり。
「総務」　清水善之、香積見一、八木又一郎
「渉外」　島田正士、三浦猛、天野敏雄、清水和子、鶯尾武治
「指導普及」　近藤金博、松下一郎、大迫末司、藤森晋、渡辺慶寿、酒井嘉幸
「競技」　岡前義春、平地英正、中野偉夫、豊島進太郎、鶴岡光子、国原英子、江沼智恵
「審判」　今野邦彦、高橋英次、深美成男、塩川安賢、勝繁夫、津島達郎

◇国体東京都予選（4月18日～25日、神代高、桜水商）

「高校男子」
▽準々決勝
中大付　15－4　玉川
明星　26－6　両国
神代　19－8　城南
早稲田　18－6　五商
▽準決勝
明星　21－2　中大付
神代　4－3　早稲田
▽決勝
明星　13（5－1、8－1）2　神代

「高校女子」
▽準々決勝
菊華　23－1　玉川
白鷗　12－9　井草
桜水商　14－3　二商
神代　不戦勝　四ッ谷
▽準決勝
菊華　19－1　白鷗
桜水商　8－3　菊華
▽決勝
桜水商　8－3　菊華

「教員」
桜友会　27－20　東京教員
桜友会　36－20　武蔵野教員

「一般男子」
▽一回戦
千代田印刷機　不戦勝　早大学院ク
▽準決勝
若木ク　不戦勝　芝浦ク
千代田印刷機　不戦勝　安田生命
▽決　勝
千代田印刷機　40（21－4、19－2）6　若木ク

「一般女子」
参加チームのためレナウン工業が優勝

当協会主管は3試合

◇日本・フランス国際親善試合の東京都協会主管の3試合は次のとおり。

▽6月19日（午後3時30分）早大記念会堂（女子）大崎電気（男子）芝浦工大
▽22日（午後6時）東京体育館（女子）大崎電気（男子）千代田印刷機
▽7月15日（午後3時30分）東京体育館（女子）レナウン工業（男子）大崎電気

お知らせ

ことしから各都道府県協会だよりのページを設けました。これは各県協会が独自の機関誌、広報、プリントを出すかわりに、このページで代用してもらうためです。必要なページ数をお申し込みください。なおいくぶん費用がかかります。必要な協会は直接本誌編集部にお問い合わせください。（日本協会高嶋理事長）

投書欄

地方の発展に全力を

7人制になってハンドボールがさかんになったという。しかしそれは関東、関西、東海だけと思う。私の住む宮城県はそれほどでない。大会が少ないので試合のチャンスがない。これでは発展しない。地方の発展に全力をつくしてください。外国チームが来日しても東北には来ない。見たいと思うけれどむりだ。韓国チームが二度来日したがそれもだめ。ことしフランスチームが来日するが、東北にはまたも来ない。私は思う。地方が発展すれば日本のハンドボールが発展する。そうではないでしょうか。

（宮城県古川市・木村佑悦）

（協会から――私たちも大いに努力しますので、ご協力ください）

軽視許せぬ韓国の実力

日韓高校戦で日本側は全く予想しなかった1勝5敗という成績に終わった。一昨年日本チームが訪問したときは6戦5勝1引き分けの好成績で、日韓の差は三年ぐらいはあるだろうという景気のよい話が伝えられたものである。ところが昨年のこの低調はどう説明したらよいのだろう。韓国の実力があっという間に日本のレベルに追いついてしまったのだろうか。もしそうだとすれば、追い抜かれてしまうのも時間の問題。本誌やその他新聞などから推すと、韓国指導者の熱意はなみなみならぬものがあるようだ。近い将来韓国からも世界選手権に代表を送るようになるだろう。そのときは当然『アジア地区代表』をかけて『予選』を両国の間で行なわねばならない。このままの力で韓国のレベルが伸びていったとするなら、日本がこの『予選』で苦戦するかもしれない。日本のサッカーなどは韓国の実力の前に、世界選手権予選や五輪予選で敗退している。ハンドボール界も韓国の動向を軽視してはならないと思う。（東京・園田邦広）

（協会から――ご意見ごもっともです。大いに努力します）

日仏戦TV中継を

6月にフランスから男女両チームが来日する。この試合をできるだけ多く、テレビで中継してほしい。テレビによるスポーツファンは非常に多い。ハンドボール界にとって絶好のPR機会になると思います。また、試合の行なわれない地方の選手にとっては技術研究のために有意義です。（大阪・一高校生）

（協会から――6月19日の第1戦と7月15日の最終戦をNHK教育テレビで中継してもらうよう交渉中です）

質問欄

問い 第1回全国高校に出場した大阪代表校をお知らせください。（大阪・佐々木力）

答え 第1回大会は予選のワクが現行より広く、大阪からは次の各校が出場した。男子＝豊中、桜塚、鳳、天王寺。女子＝寝屋川、春日丘、梅花、桜塚。

問い 本誌16号で同大が38年春に立大を破ったとありますが、大会名とスコアを。（東京・志田生）

答え ご質問の試合は昨年6月16日京都市体育館で行なわれた第15回立大対同志社大定期戦。スコアは21―17でした。

問い ハンドボール界の主な連勝記録を教えてください。（京都・芳村幸夫）

答え 地方球界での連勝記録はわかりませんが、全国的に有名なものは桜台高の55連勝、芝浦工大の47連勝、女子の愛知紡の37連勝などがあります。

問い ヨーロッパ・カップ・トーナメントについてお知らせください。（岡山・椙山甫）

答え 世界選手権に次ぐ権威を持っている大会（7人制）で、昭和32年パリで第1回を開きました。世界選手権と違う点は、第1回は都市対抗、第2回（昭34）以後は各国の選手権チームによって優勝が争われていることです。つまりこの大会にはナショナルチームは出場できないのです。男子は第3回（昭36）までは隔年、それ以後は毎年開かれている。女子は昭和36年から毎年開かれています。これまでの優勝チームは次の通り。

▽男子　第1回　プラハ市（チェコ）、第2回　RIK・ゲーテルボルグ（スウェーデン）、第3回　F・A・ギョッピンゲン（西独）、第4回　F・A・ギョッピンゲン（西独＝2連勝）、第5回　ダクラ・プラハ（チェコ）

▽女子　第1回　スティンタ・ブカレスト（ルーマニア）、第2回　スパルタク・P・ソコロボ（チェコ）、第3回　ツルド・モスクワ（ソ連）

質問はハガキ。住所、氏名（紙上匿名可）年齢、職業、記入のうえ編集部質問欄係まで。

編集後記

▽…第5回男子7人制世界選手権大会で日本がノルウェーに勝って1勝をあげた。こんなうれしいことはない。世界選手権大会に参加すること四回、初めての勝利である。役員のひとりとして日本チームのプレーを見たが、文字どおり最高の出来ばえだった。努力すればなんでもできることを証明してくれた。対ソ連戦は竹野君の負傷退場で敗れたが、実に惜しかった。次の大会にはぜひベスト8にはいりたい。それを目ざしてこれからも大いにがんばろう。

▽…GKの尾形君が対ステラ戦で右眼を強打して入院。マネジャーの片瀬先生が付き添いでパリに残り、選手団より遅れて4月6日帰国した。選手団としてあらゆる手を打ってきた。フランス協会、ステラチーム関係者、日本大使館、パリ駐在の河内理事、通訳の塚本画伯にいろいろとお世話になった。紙上から厚くお礼申しあげる。

▽…ステラチームが6月17日に来日と決まった。サンモールで同チームと試合したが、なかなか好感の持てるチームである。来日したら大いに歓迎してやりたい。それにフランス協会のピカール理事長が日本チームの面倒をよく見てくれた。同理事長が来日したら日本選手団で羽田まで出迎えに行く。

▽…NHKの杉山記者は私の渡欧中に本号の原稿をまとめておいてくれた。これは大助り。いつもながら杉山記者の誠意には感謝している。

▽…全日本実業団選手権でレナウン工業東京がチーム結成いらい初めて全日本のタイトルを握った。昨年夏から上昇気運にあり、苦労のすえやっと優勝した。鈴木社長、塩川監督、山田選手の喜びは大きかったにちがいない。ことしも大いにがんばってもらいたい。（ふぐ）



ハンドボール
日本ハンドボール協会編
第十七号
昭和三十九年六月十日印刷
昭和三十九年六月十五日発行
発行所
日本ハンドボール協会
東京都千代田区神田駿河台四ノ六
電話(251)九五一一〜五　振替東京五八三四八番
編集兼発行人　高嶋冽
定価百三十円
(〒)二十円